

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第21集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅲ
(環濠等状況調査2)

2001

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第21集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅲ
(環濠等状況調査2)

発刊にあたって

本書は、原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した、平成12年度の原の辻遺跡発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は、中国の歴史書『魏志倭人伝』に登場する、「一支國」の「王都」として特定されている遺跡です。『魏志倭人伝』に記された3世紀の日本に存在した国々の中で、国がはっきりと特定されているのは唯一原の辻遺跡だけで、全国的にも稀有で貴重な遺跡です。その重要性が認められ、平成9年9月に国史跡、平成12年11月には国特別史跡の指定を受けました。弥生時代の遺跡で特別史跡の指定を受けているのは、静岡県登呂遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡と原の辻遺跡の3遺跡だけです。

平成10年度・平成11年度に実施した特定調査事業に伴う発掘調査では、遺跡の北西部の状況を詳しく知ることができました。また、中国の前漢時代の「五銖錢」や「三翼鏡」、新時代の「貨泉」、朝鮮半島の葉浪系の「馬車具」(「車輿具」)、日本最古の「金鏡」などの大陸伝来の貴重な遺物も発見しました。今年度の調査は、平成11年度に統いて環濠等状況調査として、遺跡の北西部における環濠をはじめ、より詳細な状況の調査を実施しました。その結果、新たな構造や大陸から伝えられた貴重な遺物を発見しました。

今回の発掘調査の成果を学術的な資料として、また文化財の保護のために役立てていただければ幸いです。

平成13年3月31日

長崎県教育委員会教育長 木村道夫

例　　言

1. 本書は、原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した、平成12年度の原の辻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡の調査地区は、長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴龜触字不條・八反に所在する。
3. 調査は長崎県教育委員会を主体として、原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織　所	長　田　川　葉
課	長　安　樂　勉
主任文化財保護主事	町　田　利　幸（現場担当）
文化財保護主事	杉　原　敦　史（現場担当）
文化財保護主事	藤　村　誠（現場担当）

4. 本書で使用した遺物と遺構の実測および製図は、原の辻遺跡調査事務所が行った。
5. 本書に収録した遺物・図面・写真は、原の辻遺跡調査事務所で保管している。
6. 本書の写真は、町田利幸が撮影した。
7. 本書の執筆は、I.. II.. III. 1. を藤村誠が、それ以外を杉原敦史が担当した。
8. 本書の編集は、杉原敦史が行った。

本　文　目　次

I. 遺跡の立地と環境.....	1
1. 地理的環境.....	1
2. 歴史的環境.....	2
II. 調査の経緯.....	3
III. 調　　査.....	7
1. 調査概要.....	7
2. 遺　　構.....	8
3. 遺　　物.....	31
4. ま　　と　　め.....	94

表　目　次

第1表　これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果.....	1
第2表　Pt1出上小砾分析	29

挿図目次

第1図	奄岐島および遺跡位置図	1
第2図	平成11年迄の調査成果による主要遺構配置図(1/8,000)	5
第3図	調査区配置図(1/5,000)	6
第4図	主要遺構配置図(1/1,000)	9
第5図	A区・B区遺構配置図(1/100)	11
第6図	D区・E区遺構配置図(1/100)	13
第7図	C区遺構配置図(1/100)	15
第8図	F区遺構配置図(1/100)	16
第9図	A区西壁・B区東壁土層図(1/60)	17
第10図	B区南壁土層図(1/60)	18
第11図	C区北壁土層図(1/60)	19
第12図	D区南壁土層図(1/60)	20
第13図	E区東壁・南壁土層図(1/60)	21
第14図	F区南壁土層図(1/60)	22
第15図	塗・溝・集石遺構土層図(1/20, 1/40)	23
第16図	1号溝・2号溝遺物出土状況(1/40)	24
第17図	1号・3号・4号・5号土壤実測図・土層図(1/30)	25
第18図	2号・6号土壤実測図・土層図(1/30)	26
第19図	1号旧河道集石遺構実測図(1/40)	28
第20図	D区1号旧河道V層出土土器①(1/4)	32
第21図	D区1号旧河道V層出土土器②(1/4)	33
第22図	D区1号旧河道VI層出土土器(1/4, 1/6)	34
第23図	E区2号旧河道出土土器(1/4)	35
第24図	B区1号塗出土土器, C区1号塗出土土器①(1/4, 1/6)	36
第25図	C区1号塗出土土器②, A区1号溝出土土器①(1/3, 1/4)	37
第26図	A区1号溝出土土器②(1/4)	38
第27図	B区2号溝出土土器(1/3, 1/4)	41
第28図	F区土器塗I層出土上土器①(1/4)	42
第29図	F区上土器塗I層出土土器②(1/4)	43
第30図	F区土器塗I層出土上土器③, F区土器塗III層出土上土器①(1/3, 1/4)	44
第31図	F区土器塗III層出土土器②(1/3, 1/4)	46
第32図	F区土器塗IV層出土上土器(1/4)	48

第33図	F区上器窓V層出土土器 (1/4, 1/6)	49
第34図	F区土器窓VI層出土土器① (1/4).....	50
第35図	F区上器窓VI層出土土器②, F区土器窓VII層出土土器 (1/4).....	51
第36図	C区落ち込み1出土土器① (1/4).....	52
第37図	C区落ち込み1出土土器②, C区落ち込み2出土土器 (1/3, 1/4)	53
第38図	D区集石遺構試掘 sondage出土土器 (1/4, 1/6)	54
第39図	朝鮮半島系出土土器 (1/3).....	56
第40図	石器・石製品① (2/3).....	59
第41図	石器・石製品② (1/2).....	60
第42図	石器・石製品③ (1/2).....	61
第43図	石器・石製品④ (1/2).....	62
第44図	石器・石製品⑤ (1/2, 1/3)	63
第45図	石器・石製品⑥ (1/3).....	64
第46図	石器・石製品⑦ (1/3).....	65
第47図	石器・石製品⑧ (1/3).....	66
第48図	石器・石製品⑨ (1/3, 1/4)	67
第49図	石器・石製品⑩ (1/3).....	68
第50図	木製品① (1/2, 1/4)	70
第51図	木製品② (1/4).....	71
第52図	木製品③ (1/4).....	72
第53図	木製品④ (1/4).....	73
第54図	木製品⑤ (1/4).....	75
第55図	木製品⑥ (1/4).....	76
第56図	木製品⑦ (1/4).....	77
第57図	木製品⑧ (1/4).....	78
第58図	木製品⑨ (1/4).....	79
第59図	木製品⑩ (1/4).....	81
第60図	木製品⑪ (1/4).....	83
第61図	木製品⑫ (1/6).....	85
第62図	木製品⑬ (1/8, 1/10).....	87
第63図	木製品⑭ (1/4).....	89
第64図	木製品⑮ (1/4).....	91
第65図	金属製品・骨角器・上製品・装飾品 (1/1, 1/2)	92
第66図	時期別遺構配図 (1/500).....	95

I. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

玄界灘に飛び石のように浮かぶ壱岐島は東西約15km、南北約17km、面積約139km²、対馬とともに長崎県に属し、人口は約3万5千人の島である。朝鮮半島釜山から対馬までは約52km、対馬から壱岐及び壱岐から福岡県博多までは約67km、壱岐から佐賀県唐津までは約26kmの距離に位置する。長崎県への海上交通アクセスはなく、行政的には長崎県に属するものの文化的・経済的には福岡県との繋がり深い。

島は全体が平坦な溶岩台地で、起伏は少なく最も高い岳の辻でも標高は213mにすぎない。現在の耕地面積は32%で険しい山々からなり耕地面積も2.7%の対馬とは好対照をなしている。島の基盤は古第三期層で、玄武岩がその表面を覆い、弥生時代以降の箱式石棺や古墳石室の石材として利用されている。島であるがゆえ自然環境の破壊は都市部ほど進まず、歴史・文化の研究フィールドとしてはとても有効な場所である。『魏志倭人伝』には「……耕田猶不足食……」とあるが、島南東部の「深江田原」は県内第2の沖積平野で、有数の穀倉地帯となっている。原の辻遺跡はこの平野の中に舌状に突き出した台地（標高18m）と現在の水田面からなり、現在の遺跡の範囲は約100haである。また遺跡北側には東西に幡ヶ浦川が流れ、約1kmで内海（うちめ）に注いでいる。また、遺跡の位置する「深江田原」は冬になると北西の強風が吹くことでも知られている。



第1図 壱岐島及び遺跡位置図

2. 歴史的環境

玄界灘に浮かぶ壱岐島は古くから対馬とともに大陸や朝鮮半島との人的・物的な交流拠点として、また防衛上の要衝として歴史的に重要な役割を担ってきた。

壱岐が初めて歴史に登場するのは3世紀の中国の歴史書『魏志倭人伝』で、その中に「一支國」として記載され、弥生時代終末期の壱岐の状況が紹介されている。「(対馬国から)南に渤海という海を渡り、千余里行くと、一大国(一支國)に着く。長官は卑狗、副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹木・農林が多く、三千ばかりの家がある。やや田地があるが、食べるには足らない。南北に海を渡って米などを貢ってくる。」短いが当時の壱岐を知る貴重な記述である。

現在壱岐では弥生時代の遺跡が60余カ所知られている。その中でも出土遺構・遺物ともに群を抜き、一支國の拠点集落であると考えられているのが原の辻遺跡である。原の辻遺跡は弥生前期末から集落の形成が始まり、弥生中期前半には多重の環濠を廻らし大集落として整備され、古墳前期まで集落が存続したようである。

調査の進展によって台地を環る濠、台地頂上部での集落の中核部分とみられる高床建物跡の発見、台地西側での船着き場跡の発見など、都市的様相を持つ一支國の王都としての姿を徐々に現してきた。また、大陸系の遺物や高度な建築・土木技術を何わせる遺構・遺物は、この地で大陸や朝鮮半島の人々との活発な交流が行われていたことを示してくれている。

島内で原の辻遺跡以外の弥生時代の重要な集落遺跡としてはカラカミ遺跡と車出遺跡が知られる。刈田院川の中流北岸に点在する遺跡群の中心がカラカミ遺跡である。原の辻遺跡と同じく弥生時代前期末から集落が形成され、高地に位置するものの環濠が巡っている。朝鮮半島系の瓦質土器や楽浪系の滑石混入土器の出土は大陸との頻繁な交流を物語る。原の辻遺跡との類似性は大きいが、集落の規模が小さく、出土遺物から漁労や交易に従事した集団の基地的な集落であった可能性が強い。

幡鉢川上流の遺跡群の中心が車出遺跡である。ここからも貨貝・卜骨等が出土する。しかし、この地域が原の辻遺跡と同じ水系で直線で約5km程上流であること、また集落の形成時期が弥生中期であることから、原の辻遺跡から派生した集団によって集落が営まれた可能性が強いと考えられる。ここにも有力者層が存在し、北から南に深く深入した半城溝を意識し、島の西側をかためるための拠点集落であった可能性もある。

5世紀後半に築造されたとみられる大塚山古墳は、原の辻遺跡を見下ろす山の上に築かれ、この地の有力者のものと考えられる。その後約1世紀近くの空白を経て巨大な古墳が島の中央部に多く見られるようになる。県内で最大の前方後円墳である双六古墳、石室に線刻が見られる鬼屋塚古墳など巨石で築いた石室墳が壱岐に極端に多い。これは朝鮮半島との交流に關心の深かった中央集権的有力者の存在を何わせるものである。

律令制下において壱岐・対馬は下国とはいえそれぞれ一つの国として扱われている。これも、壱岐・対馬のもつ大陸との交流拠点・防衛拠点としての重要性からに他ならない。

II. 調査の経緯

原の辻遺跡の調査は、幡鉾川流域総合整備計画にかかる範囲確認調査及び緊急発掘調査が平成3～6年度に実施され、弥生時代の大規模な環濠が検出されるなど重要な発見があった。

平成5年度の調査は、遺跡の東側一帯の緊急発掘調査と北側から西側一帯の範囲確認調査を実施し、環濠をはじめとする重要な遺構等が検出された。その結果にもとづいて協議を行い、平成5年度の調査箇所を含めた工事区域内の約4.5haについて、非農用地を設定し、遺構の保存を行うことになった。

平成6年度の調査は、遺構の北側一帯の緊急発掘調査を実施し、環濠等の遺構を検出した。また、遺跡の南側の大川地区では農道拡幅工事中に貴重な中国製陶磁器類などの古代の遺物が大量に発見されたために、工事を中断して調査を実施した。

平成7年度には、原の辻遺跡調査指導委員会において、これまでの調査結果に検討が加えられた結果、当該遺跡が『魏志倭人伝』中の「一支国」の王都として特定された。

平成8年度は、遺跡の西部一帯の調査を実施し、弥生時代中期前葉の船着き場跡、それに付属する石組遺構、弥生時代前期末から中期初頭にかけての水田畦畔遺構、弥生時代から古墳時代にかけての旧河遺などを確認した。

平成9年度の調査では、幡鉾川の弥生時代中期の旧河遺と漆等を確認し、旧河道内から高床建物の部材である床大引材をはじめとする多数の建築部材や100点以上の朝鮮系無文土器等が出土し、低地部分の居住域も確認した。

旧河遺の調査は、幡鉾川の河川改修工事に伴って、平成6～8年度にかけて実施した。その結果、幡鉾川の弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての旧河道4条、漆2条、溝1条を確認した。

また、これらの開発行為にともなう調査と並行して、台地部分の遺構確認調査を平成6～11年度まで実施し、台地頂上部分とその周辺部の調査で、祭祀用と考えられる高床建物の柱穴群や区画のための台地を東西に切る濠等を検出し、この付近一帯が遺跡の中核的部であることが判明した。台地北側の高元地区では、堅穴住居跡等を検出し、この地区が居住域であることを確認した。

平成10年度からの特定調査事業では遺跡の北西低地部を中心に調査が行われた。その結果、弥生時代中期の環濠を台地下の北西部地域で初めて確認するとともに、複雑に中継し合う弥生時代後期の濠群も確認した。また平成11年度には、弥生時代中期前半の環濠2条が確認され、出土遺物の状況などから、この時期に多重環濠が成立し本格的な拠点集落として整備されたことが明らかになった。さらに、これらの環濠が旧河遺の手前で止まり、台地西縁を流れる旧河道が途切れた環濠を補完していたこともわかつてき。

本年度は弥生時代後期の濠群の追跡調査や、遺跡北西低地部のさらに詳しい状況を把握するために過去2年間の調査区の隙間を埋めるような形で調査区を設定し、平成12年5月18日から平成12年10月20日の期間、長崎県教育委員会を主体に、原の辻遺跡調査事務所が担当して、面積1,300m²の調査を実施した。

調査・発見年度	発見者・調査主体	主な成果
大正～昭和初期	松本友雄・山口麻太郎	学会への遺跡の紹介。
昭和14年	輔田忠正	幡鉾川改修に伴う新道整備での調査。
昭和26～39年	九学会・東亜考古学会	住居跡、墓域の確認。卜骨、貨泉出土。原の辻上層式の設定。石器から鐵器へ転換した典型的遺跡の評価。
昭和29年	東亜考古学会	圓場整備で大原地区から細形銅劍2・銅戈1出土。
昭和49年	長崎県教委	大原地区で、個人の基盤整備に伴って斐桜墓51・石桜墓19を発見し、戰国式銅劍1・トンボ玉など出土。
昭和51～52年	長崎県教委	大川地区、原ノ久保A地区、原ノ久保B地区などの墓域を発見。大川地区では、方格規矩縫、有鉤無鉤など出土。遺跡が台地上に広域に拡がることを確認。
平成3～5年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	幡鉾川流域総合整備事業に伴う範囲確認調査。災害に伴う緊急調査。環濠の一部などを発見する。
平成5年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	台地東部で環濠、大溝を確認し、遺跡が大規模な多重環濠集落であることが判明する。各種の膨大な資料が出土する。
平成6年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	原地区の高台部分で高床建物群を確認。弥生時代中期～古墳時代初頭の住居跡13軒、土壙30基などを確認し、卜骨、獸帶鏡などが出土する。
平成7年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	原地区高台部分で弥生時代高床建物群と古墳時代初頭堅穴住居跡、漆2条など確認。大川地区の墓域調査。調査指導委員会で一志國の工都と特定される。
平成8年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	遺跡北側と西側の水田部分に弥生時代中期の居住城が拡がることを確認する。新たに濠や旧河道なども確認し、ココヤシ製笛など出土する。台地西側の八反地区で、船着き場跡と水田畦畔遺構を発見する。原地区で濠と堅穴住居跡を確認する。原ノ久保地区では墓域を確認し、内行文化鏡などが出土する。
平成9年	長崎県教委・芦辺町教委	遺跡北西部の溜池予定地で、弥生時代中期の旧河道を確認し、高床建物の床大引材を発見する。池田大原地区で濠を確認する。原地区では濠と堅穴住居跡を確認する。
平成10年	長崎県教委・芦辺町教委	不條地区で弥生時代中期の旧河道、弥生時代中期～後期の旧河道、弥生時代中期の濠1条、弥生時代後期の濠5条、弥生時代や古墳時代の溝などを確認し、前漢時代の五銖銭や三翼鏡などが出土する。
平成11年	長崎県教委・芦辺町教委	不條・八反地区で弥生時代中期～古墳時代前期の旧河道、弥生時代中期～後期の旧河道、弥生時代中期の環濠3条、弥生時代後期の濠1条、弥生時代中期～後期の土器窯、古墳時代前期の溝などを確認し、貨泉4枚、楽浪系の青銅製馬車具、板状鉄斧、弥生時代後期～古墳時代前期の鐵製金鏡、卜骨などが出土する。
平成12年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	不條・八反地区で弥生時代中期～古墳時代前期の旧河道、弥生時代中期～後期の旧河道、弥生時代後期の濠1条、弥生時代中期～後期の土器窯などを確認する。大泉五十などが出土する。

第1表 これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果



第2図 平成11年度迄の調査成果による主要遺構配図 (1/8,000)



第3図 調査区配置図 (1/5,000)

III. 調査

1. 調査概要（第3図、第9図～第15図）

調査区は遺跡の中央に位置する台地下北西部。原の辻遺跡調査事務所周辺の非農用地に、基本的に北からA区(50m², 5m×10m), B区(550m²), C区(200m², 10m×20m) D区(200m²), E区(100m², 10m×10m), F区(200m², 10m×20m), 合計1,300m²を設定した。

基本上層は若干の色の違いがあるものの、各区で共通している。

1層は褐色の現在の水田耕作面である。

2層は近世から近代の水田層と考えられ、黄褐色をしている。

3層は古代から中世の水田面で灰褐色である。

D区・E区に見られる3層の下(D区は2層の下)の黒褐色系の土層は、古式土師器や布留式土器が出土し、古墳時代前期の水田層と考えられる。この層は既ね旧河道の上にあり、時期決定と遺構検出の両面において指標となる重要な土層である。

なお遺物の取り上げ層位と上層図の関係は次のとおりである。

B区1号濠からの出土遺物はI層が第15図の1層・2層, II層が第15図の3層, III層が第15図の4層, IV層が第15図の5層から出土したものである。C区1号濠は中層位より下からの出土遺物はなかったため、レベルを測定して遺物を取り上げた。D区の1号旧河道上の集石遺構は、目的は明確でないが人为的に積み上げられたものと考えられ、土層図を見ると、第12図の9a・9b層と12層の間には明確な時期の相違が認められる。まず、弥生中期に12層が形成され、弥生後期に9a・9b層が弥生中期の12層に重なり合う形で遺構上に堆積したようである。第15図においては第12図の9a・9b層に相当するのが1a・1b層であり、第12図の12層に相当するのが2層・5層となる。また集石で東西に分けられた1号旧河道のうち東側部分の遺物はIV層が第12図の4a～4c層, V層が第12図の10層, VI層が第12図の13a～13c層からの出土である。また集石西側の遺物はV層が第12図の7a・7b層, VI層が11a層からの出土である。E区2号旧河道からの出土遺物はI層が第13図の4層, II層が第13図の5層・7層, III層が第13図の8a・8b・9層からの出土である。F区上器窓からの出土遺物のI層は第14図の5a～5p層, II層は第14図の6b・6f・6g層, III層は第14図の7層, IV層は8d・8e層, V層は9a～9d層, VI層は10層, VII層は11a・11b層からの出土である。F区1号旧河道I層は第12図の4a～4d層から出土したもので古代から古墳時代の遺物が認められた。

また各調査区(D区を除く)とも古代以降の度重なる水田造成のため削平をうけており、弥生時代の遺構も上半部分に損傷をうけている。

2. 遺構（第4図～第8図）

(1) 旧河道

旧河道は、2条確認した。いずれも現在の幡鉢川の支流に相当するものと思われる。

1号旧河道は、B・C区で西岸部分の落ち込み、D区で西岸と河道の大半を、F区で西岸と河道の一部を確認した。平成10年度の船着き場付近水路等状況調査（以下、平成10年度特定調査と記す）²⁴⁾で確認した2号旧河道と、平成11年度の環濠等状況調査（以下、平成11年度特定調査と記す）²⁵⁾で確認した1号旧河道に繋がるものである。

今年度の調査では、D区において最大幅約17m、最深部約1m、長さ約20mを確認した。南から北方向に流れて本流に合流したものと考えられる。時間的制約もあり完掘はしていない。河道内では、河道中央よりやや東側に人為的に形成された集石遺構と、時期の異なる2条の流路を確認した。平成11年度特定調査において河槽内は、時期の異なる流路が複雑に切り合っている状況を確認していた。今回集石遺構の東側で弥生後期前半の流路、西側で古墳時代前期の流路を確認したが、それ以外でも細かな流路が存在する可能性が高い。出土土器は、弥生中期後半の須玖Ⅱ式～古墳時代前期初頭までの様相をもち、河道内の複雑な擾乱を示す。土器を探り上げた際作成したドットマップにより詳細な時期別の流路のゾーニングを行うことが今後の課題となる。また、集石遺構の西側から河道西岸にかけての部分は、弥生後期～古墳時代前期にかけて水田にするため埋め立てられたと考えられる。しかし、埋め立てから時を隔てず古墳時代前期の流路によって切り込まれたと推測される。F区においても今回完掘する事は時間的制約がありできなかったが、隣接する平成11年度特定調査E区ではこの河道が大別3層に分かれ、上層が古墳時代～古代の層、中層が弥生後期～古墳時代前期の層、下層が弥生中期～弥生後期となることを確認している。今回はこの上層まで調査した。この地区は、台地と微高地に挟まれた狭い場所である。河道はこの狭い場所では流路を重層的に重ね、北に向かって開けてくると平面的に流路が展開する状況であったと考えられる。

2号旧河道は、E区において北岸と河床の一部を確認した。平成11年度特定調査E区で確認した3号旧河道にあたる。流れの方向は確認できていないが、平成11年度特定調査E区東部より南側の地域で、1号旧河道から分岐、または合流すると考えられる。平成11年度特定調査では2号旧河道の北岸は、今回のE区では東南端に一部検出するものと考えられたが、今回の調査により、北岸はさらに北に拡がることを確認した。弥生中期初頭～弥生後期中葉の資料が出土した。

(2) 濠（第15図）

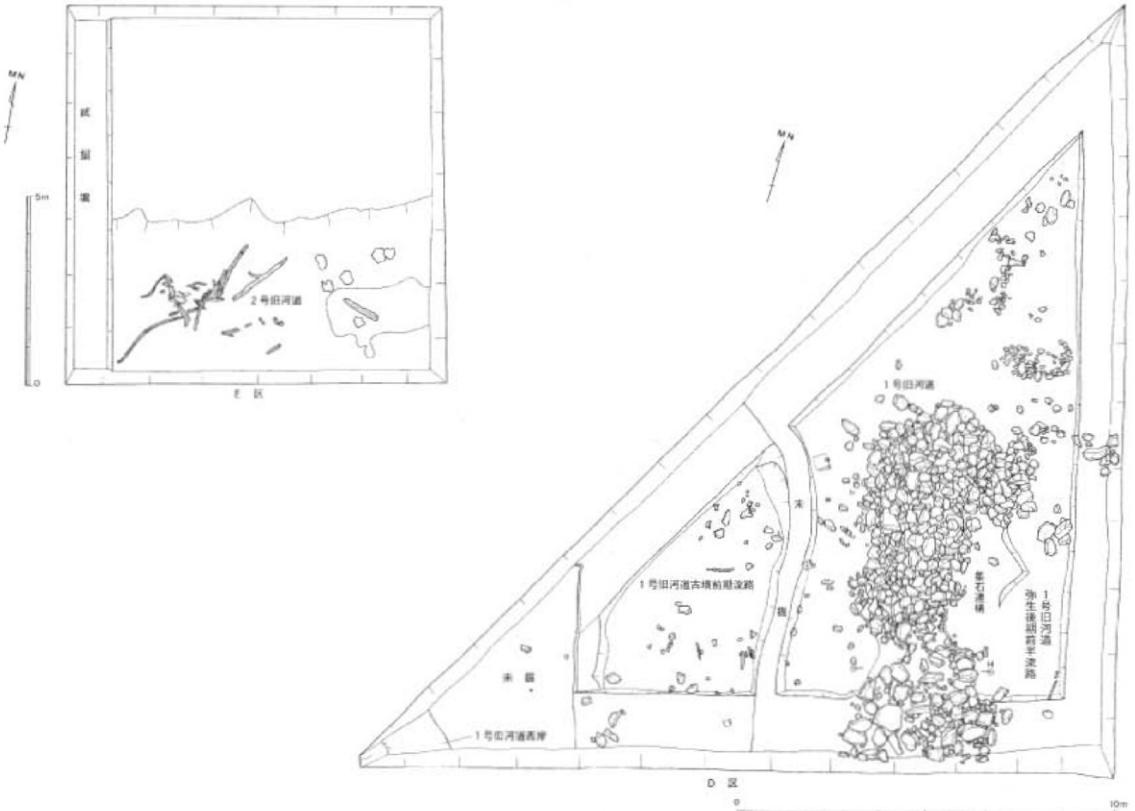
濠は1条検出し、B区とC区で確認した（1号濠）。平成10年度特定調査E区で検出した6号濠、平成11年度特定調査B区で確認した4号濠に繋がるものである。弥生後間に掘られ、古墳時代前期に埋没したと考えられる。B区において最大幅約4.5m、最深部約1.2mを測り、長さ約16mを確認した。C区では長さ約3.5mを確認した。また、平成10年度特定調査E区からはじまるこの濠が、C区で止



第4図 主要構造配置図（A～F区、国橋I区以外は平成8年度から平成11年度の調査区）(1/1,000)



第5図 A区・B区造構配図 (1/100)



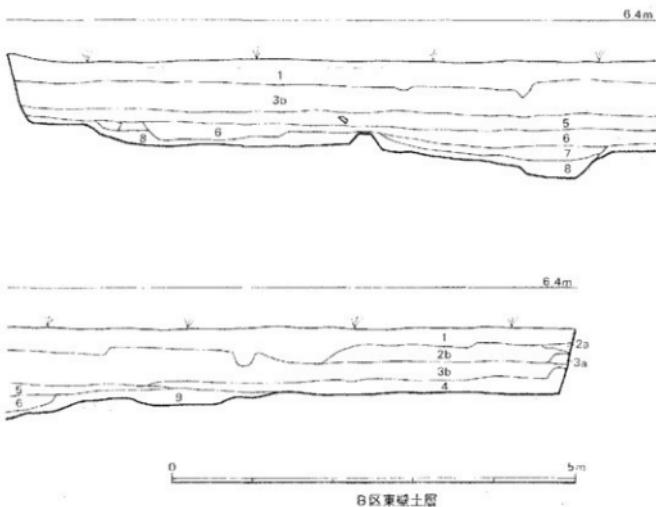
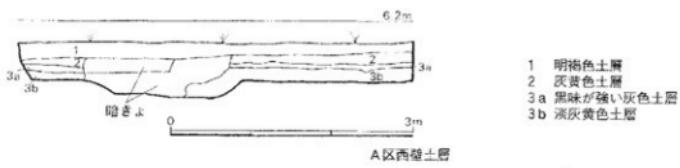
第6図 D区・E区遺構配置図 (1/100)



第7図 C区構造配置図 (1/100)

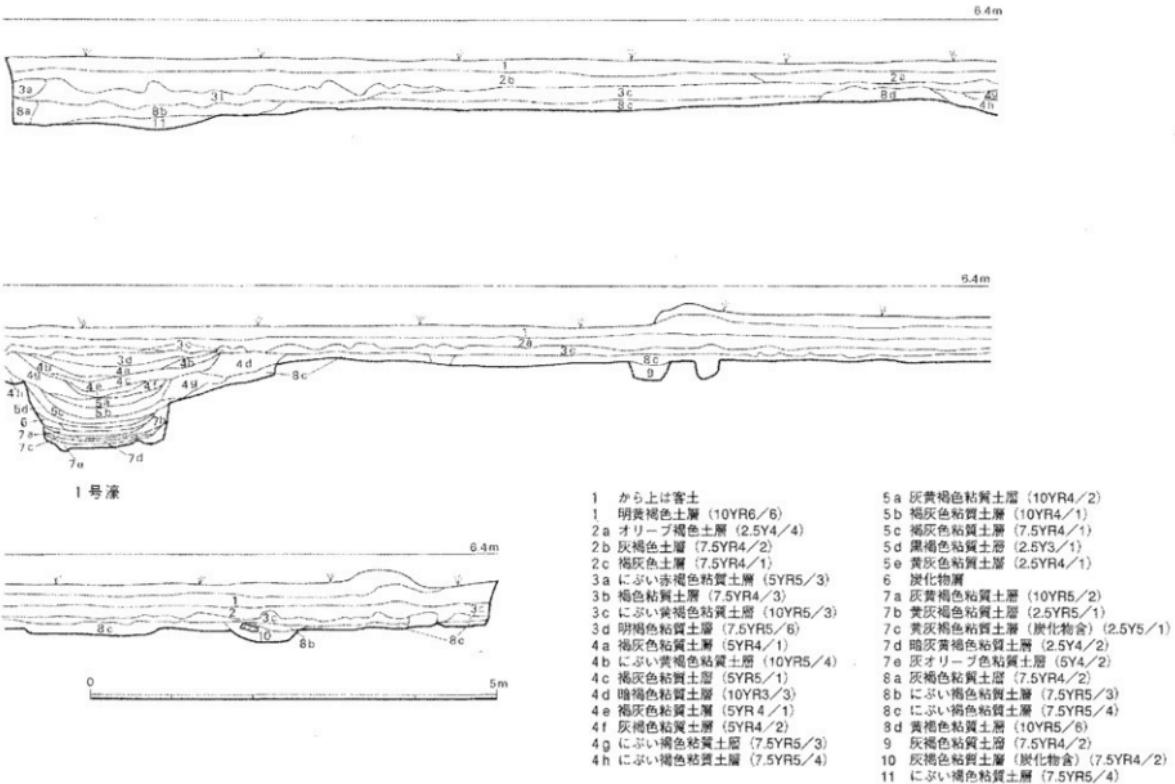


第8図 F区遺構配図 (1/100)

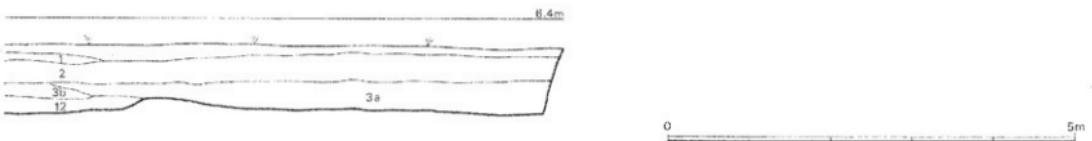
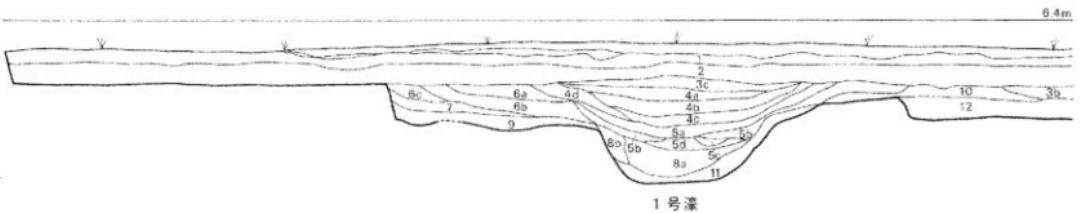


- 1 明黃褐色土層 (10YR6/6)
- 2a 灰褐色土層 (7.5YR4/2) (B区南壁2bと同じ)
- 2b 褐灰色土層 (7.5YR4/1) (B区南壁2cと同じ)
- 3a にぶい赤褐色粘質土層 (5YR5/3) (B区南壁3aと同じ)
- 3b 褐色粘質土層 (7.5YR4/3) (B区南壁3bと同じ)
- 4 褐灰色粘質土層 (5YR4/1) (B区南壁4aと同じ)
- 5 にぶい褐色粘質土層 (7.5YR5/4)
- 6 褐灰色粘質土層 (10YR4/1)
- 7 暗灰黄色粘質土層 (2.5Y5/2)
- 8 灰オリーブ色粘質土層 (5Y5/3)
- 9 にぶい黄褐色粘質土層 (10YR5/4)

第9図 A区西壁・B区東壁土層図 (1/60)

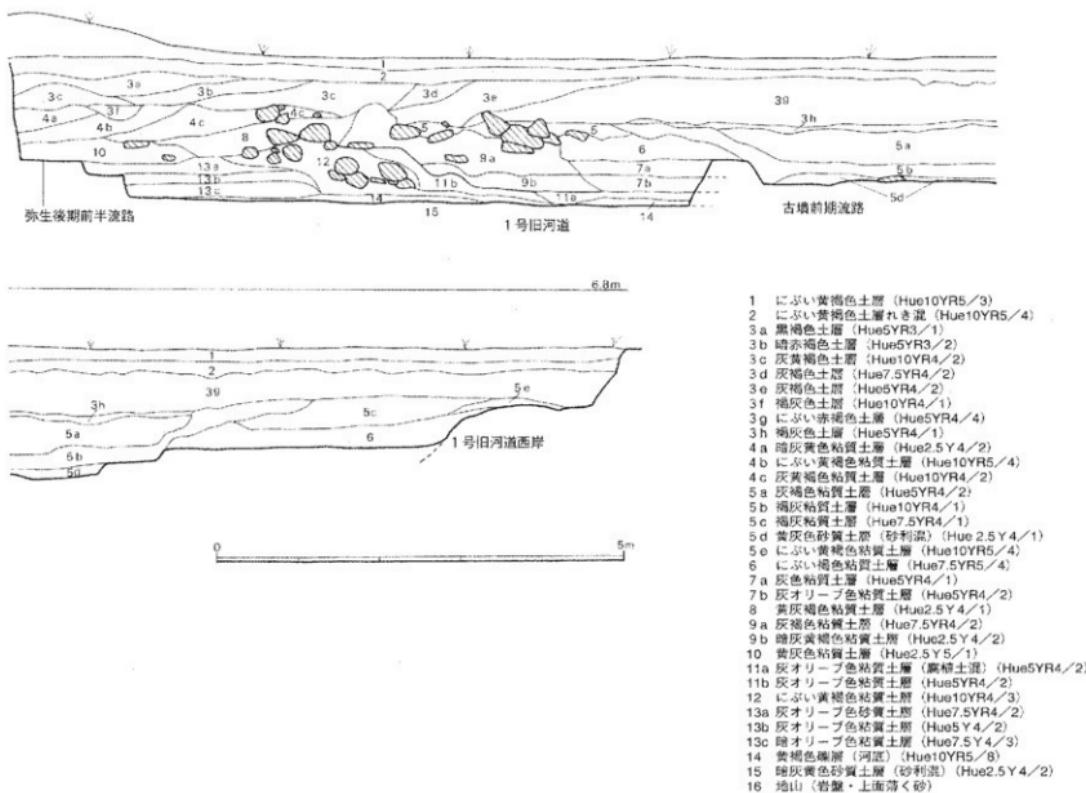


第10図 B区南壁土層図 (1/60)

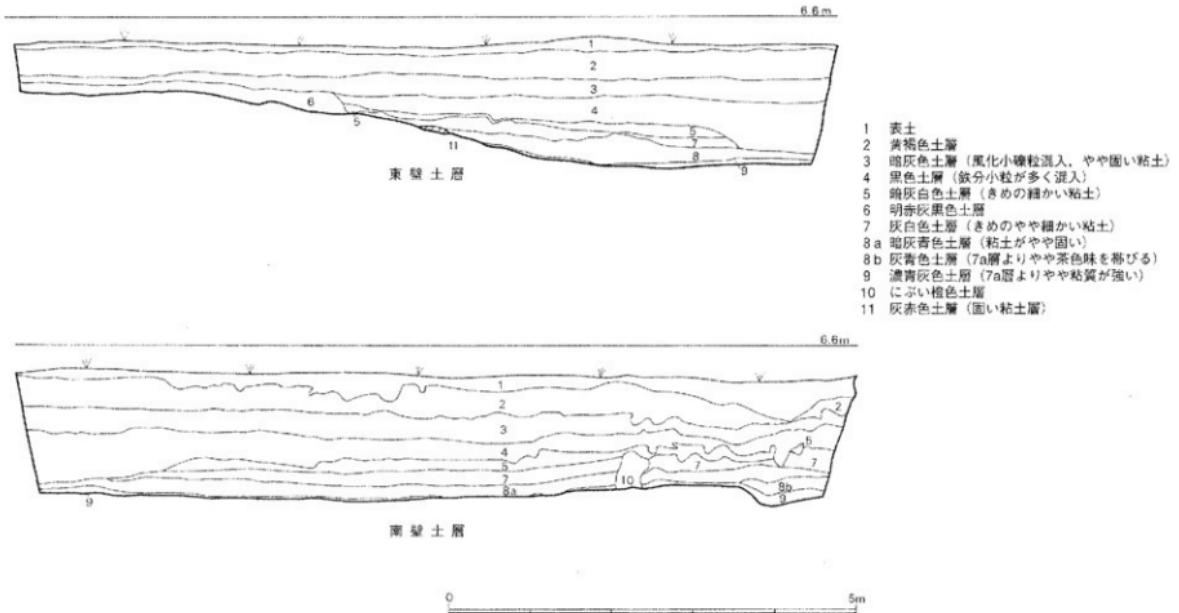


- | | |
|-------------------------------------|------------------------|
| 1より上は客土 | 6 a 暗灰色粘質土層 (7.5YR4/1) |
| 1 黄褐色土層 (10YR5/6) | 6 b 灰褐色粘質土層 (7.5YR4/2) |
| 2 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) | 6 c 灰褐色粘質土層 (5YR4/2) |
| 3 a 暗灰色粘質土層 (5YR4/1) | 7 暗色粘質土層 (7.5YR4/4) |
| 3 b 暗灰色粘質土層 (7.5YR4/1) | 8 a 灰オリーブ色糞食土層 (5Y4/1) |
| 3 c 暗灰色粘質土層 (5YR5/1) | 8 b 灰色糞食土層 (5Y4/1) |
| 4 a 灰褐色粘質土層 (10YR4/2) | 9 にぶい黄褐色粘質土層 (10YR4/3) |
| 4 b 暗灰色粘質土層 (10YR4/1) | 10 暗灰色粘質土層 (5YR5/1) |
| 4 c 暗褐色粘質土層 (2.5Y4/2) | 11 オリーブ黒色粘質土層 (5Y3/2) |
| 4 d 黄褐色粘質土層 (2.5YR4/1) | 12 にぶい黄色土層 (10YR5/3) |
| 5 a 岩化物混黒褐色粘質土層 (10YR3/1) | |
| 5 b 岩化物混暗褐色粘質土層 (10YR3/3) | |
| 5 c 岩化物混黒褐色粘質土層 (10YR5/4) (2.5Y3/2) | |
| 5 d 岩化物流脂オーリーブ色粘質土層 (5YR4/4) | |

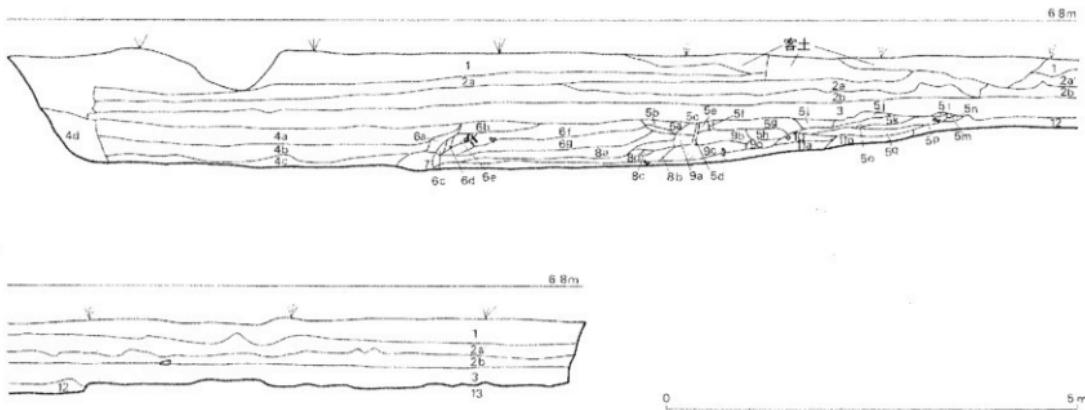
第11図 C区北壁土層図 (1/60)



第12図 D区南壁土層図 (1/60)

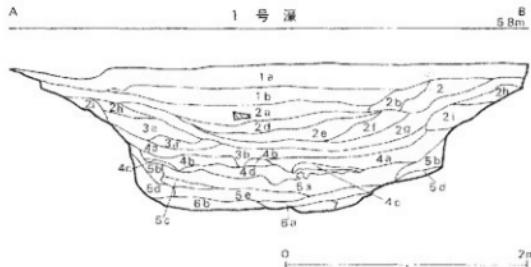


第13図 E区東壁・南壁土層図 (1/60)

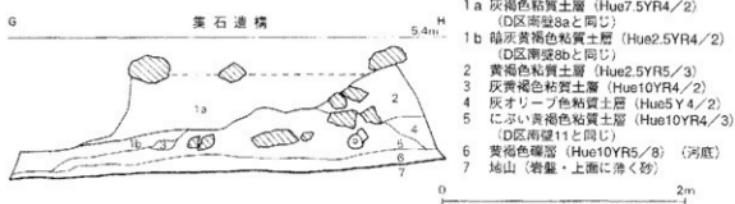
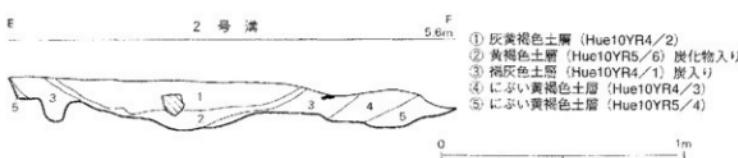
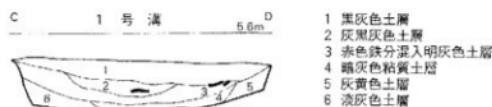


1 表土	5 h 淡灰黄色土層	6 g 暗黃灰色土層
2 a 茶褐色土層（表土2層が混る）	5 i 淡黃灰色土層	7 黑茶色土層
2 a' 赤灰色土層	5 j 黃灰色土層（炭化物有）	8 a 明灰黃色土層
2 b 明灰色粘質土層	5 k 灰白粘質土層	8 b 灰茶色土層（やや赤味を帯びる）砂質ぎみ
3 暗灰色粘質土層	5 l 灰黃色土層	8 c 灰茶色粘質土層
4 a 黑灰色土層	5 m 黄色砂質土層（炭化物混り）	8 d 灰綠色土層
4 b 淡黑茶色土層	5 n 暗灰色土層（炭化物混り）	8 e 灰白黑色土層（砂混り）
4 c 淡黑茶色土層	5 o 暗灰黃色土層	9 a 暗灰茶色土層（風化礫やや混じる）
4 d 深黑色土層（薄泥り）	5 p 黑茶灰色土層	9 b 暗灰茶色土層（風化礫やや混じる）
5 a 暗灰色粘質土層	5 q 灰黃色粘質土層	9 c 暗茶黑色土層（5~10cmの風化礫を含む）
5 b 淡灰色粘質土層	6 a 暗灰白色土層	9 d 暗茶色土層（風化礫混じる）
5 c 淡灰色土層	6 b 暗灰色土層	10 灰赤色砂質土層（風化礫混入）
5 d 明黃色土層（木の根）	6 c 明灰白色土層	11 a 灰色砂混粘質土層
5 e 暗黃色土層（土の粒子が粗い）	6 d 淡灰色土層	11 b 灰赤色品質土層
5 f 暗灰色土層	6 e 淡黃色土層	12 にぶい赤褐色粘質土層
5 g 暗黃灰色土層（若干炭混入）	6 f 暗灰黃色土層	13 白灰色粘質土層（地山）

第14図 F区南壁土層図 (1/60)



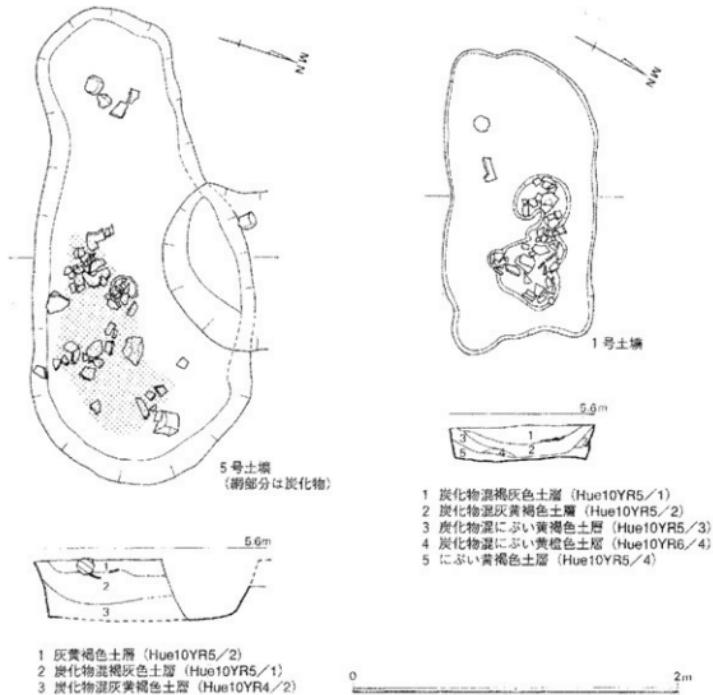
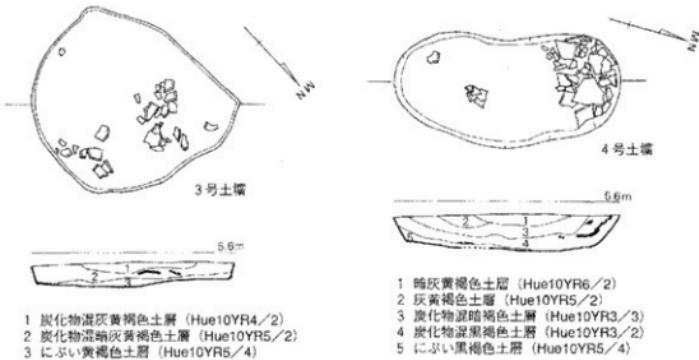
- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 a にぶい褐色土層 (Hue7.5YR5/3) | 4 a 黄灰色粘質土層 (Hue2.5Y4/1) |
| 1 b 灰褐色土層 (Hue7.5YR4/2) | 4 b 黄灰色粘質土層 (Hue2.5Y4/1) |
| 2 a 灰褐色土層 (Hue5YR4/2) | 4 c 壊化物層 |
| 2 b 褐色土層 (Hue7.5YR4/3) | 4 d 暗黄色褐色粘質土層 (Hue2.5Y4/2) |
| 2 c にぶい赤褐色土層 (Hue5YR4/3) | 5 a 木の葉枝混灰黄褐色粘質土層 (Hue2.5Y5/1) |
| 2 d 灰黃褐色土層 (Hue10YR4/2) | 5 b 木の葉枝混灰黄褐色粘質土層 (Hue2.5Y6/2) |
| 2 e にぶい黃褐色土層 (Hue10YR4/3) | 5 c 木の葉枝混灰黄褐色粘質土層 (Hue5Y5/1) |
| 2 f 褐色土層 (Hue10YR3/3) | 5 d 木の葉枝混灰オリーブ色粘質土層 (Hue5Y5/2) |
| 2 g にぶい黃褐色土層 (Hue10YR5/3) | 5 e 木の葉枝混灰オリーブ色粘質土層 (Hue5Y5/3) |
| 2 h にぶい黃褐色土層 (Hue10YR5/4) | 6 a 紫オリーブ色粘質土層 (Hue5Y4/4) |
| 2 i 褐色土層 (Hue1075YR4/4) | 6 b 暗オリーブ色粘質土層 (Hue5Y4/3) |
| 3 a 壊化物混灰褐色粘質土層 (Hue7.5 YR5/2) | 7 灰オリーブ色砂質土層 (Hue5Y4/2) |
| 3 a' 灰褐色粘質土層 (Hue7.5 YR5/2) | |
| 3 b 灰暗褐色粘質土層 (Hue2.5Y5/2) | |



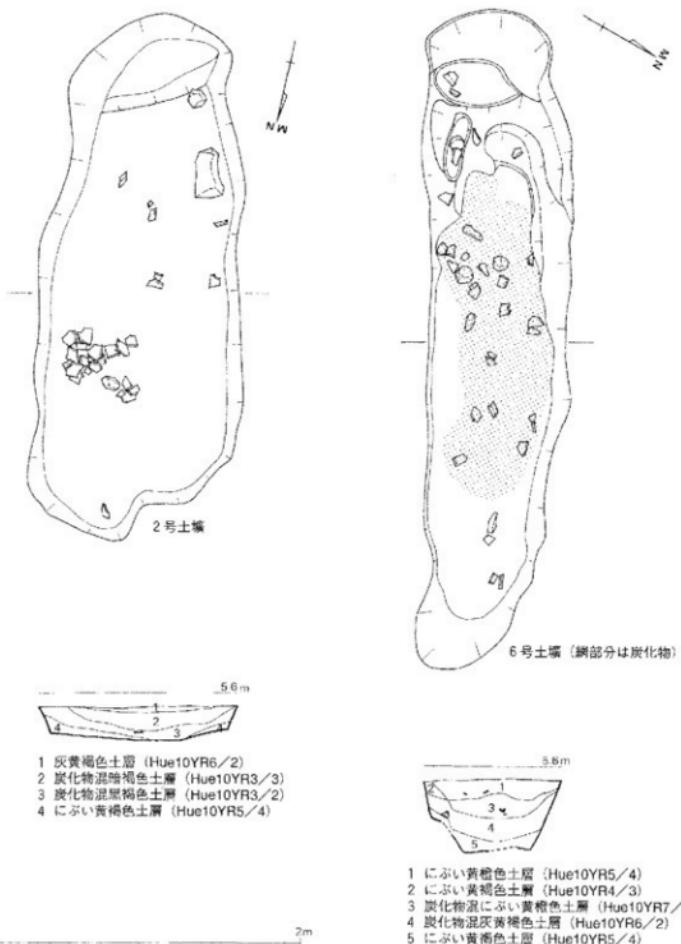
第15図 溝・溝・集石造構土層図 (1/20, 1/40)



第16図 1号溝・2号溝遺物出土状況 (1/40)



第17図 1号・3号・4号・5号土壤実測図・土層図 (1/30)



第18図 2号・6号土壤実測図・土層図 (1/30)

まることも確認した。遺跡北西部の微高地においては、平成10年度特定調査により弥生後期の濠が5条確認されている。内4条はその時の調査区からはじまり、または調査区内におさまるものであった。すべてが互いに交わることなく独立したものである。この微高地が北西方面から中央の台地に至る遺跡の入り口として防御的に重要な場所にあたり、これら濠群は「虎口」的な機能を担っていたと考えられる。さらには農業用水等に利用するために雨水や、最下部が切り込んでいる縄文時代の泥炭質層からの湧水をためたものと考えられる。

(3) 溝（第15図・第16図）

溝は2条検出した。1号溝はA区で検出した。A区中央のやや西から北東に向かって走る。A区の東側の隣接地は平成10年度特定調査B区であるが、この辺りで溝は確認しておらず、上曇の一部と考えていたものに繋がって止まる。何らかの区画溝的役割をもつものと考えられる。最大幅約1.7m、深さ約20cmを測り、約8mを確認した。弥生中期後半の須玖II式を主体とする資料が出土したが、出土土器の内丹塗上器の占める割合が高かった。

2号溝はB区で検出した。平成10年度特定調査B区・D区で確認した5号溝に繋がるものである。今年度の国庫補助事業範囲確認調査I区でも確認している。最大幅約1.8m、深さ約20cmを測り、約3mを確認した。生活・農業用の用排水路と考えられる。弥生前期末の板付IIb式～弥生中期初頭の城ノ越式を主体とする資料が出土した。

(4) 土 塙（第17図・第18図）

今回の調査地区においては多数の土塙を確認した。ここでは実測図を掲載したものに限って報告する。いずれもB区から検出したもので、弥生中期後半の須玖II式土器を出上土器の主体とする。

1号土塙は、長径約1.7m、短径約0.9m、深さ約20cmである。2号土塙は、長径約3.2m、短径約1.2m、深さ約20cmである。3号土塙は、長径約1.2m、短径約1.1m、深さ約15cmである。4号土塙は、長径約1.4m、短径約0.6m、深さ約25cmである。5号土塙は、長径約3.0m、短径約1.4m、深さ約35cmである。6号土塙は、長径約4.1m、短径約0.9m、深さ約45cmである。

(5) 土器溜

F区の1号旧河道西側にある微高地縁の、1号旧河道に向かう傾斜地で確認した。平成11年度特定調査E区で確認したものに繋がるものである。今回の調査では完掘しなかつたが、I～VII層にわたって出土遺物を取り上げた。その結果、I～VI層がそれぞれ弥生中期～弥生後期の資料を包含していることが判明した。これは、この上器溜が時間的推移のもとで形成された一次的なものではなく、別に形成されていた一次的なものが数度にわたり崩されて層位をなした二次的なものであることを示していると考えられる。しかしながら今回この上器溜を調査した中での最下層にあたるⅦ層の出土土器は、弥生中期前葉～弥生中期後半の資料である。I～VI層に比べると古い段階でのまとまりがある。下層



第19図 1号旧河道集石造構実測図 (1/40)

NO	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
1	43.3	33.8	25.1	52.4
2	39.9	27.5	26.7	40.9
3	45.7	37.0	24.0	60.5
4	42.8	31.5	21.5	45.6
5	39.0	33.9	24.2	42.6
6	47.7	27.2	21.1	48.8
7	37.9	30.3	18.4	35.6
8	42.6	35.2	25.0	52.9
9	37.1	34.9	23.6	48.5
10	61.1	30.4	20.4	57.2
11	35.7	30.6	26.4	34.1
12	43.1	32.8	22.1	46.4
13	52.9	27.4	19.0	41.9
14	42.4	27.5	21.6	36.5
15	45.2	26.0	20.7	35.4
16	39.9	27.7	16.8	28.9
17	41.9	22.9	23.5	28.9
18	43.9	21.8	19.5	30.8
19	47.6	31.8	17.8	40.8
20	40.2	31.9	20.1	37.5
21	42.9	30.3	25.0	43.3
22	36.5	29.1	21.0	33.6
23	44.0	27.5	21.2	39.5
24	35.8	31.4	23.5	36.1
25	47.8	25.8	26.9	49.0
26	41.7	31.4	21.0	42.3
27	37.4	31.0	26.2	45.3
28	40.9	35.7	24.9	53.2
29	35.4	29.6	25.9	36.6
30	43.6	30.7	26.3	49.4
31	34.5	28.7	21.3	33.4
32	35.7	31.6	20.3	34.7
33	37.9	26.3	17.3	28.4
34	38.0	34.1	22.2	42.9
35	39.2	24.7	21.5	29.4
37	49.5	31.6	23.4	53.2
38	48.8	29.4	23.7	53.0
39	41.4	35.7	27.5	56.0
40	38.2	31.3	18.7	34.1
41	43.4	29.5	21.8	40.9
42	39.8	31.7	24.7	41.9
43	38.2	26.6	19.9	28.5
44	56.8	27.8	20.8	46.1
45	38.4	32.9	25.3	37.8
46	38.1	33.1	33.2	56.5
47	39.6	29.2	20.7	35.1
48	32.8	30.3	23.2	32.1
49	40.3	28.6	22.6	38.5
50	33.3	28.5	24.9	33.0
51	50.0	31.6	26.5	58.3
52	47.4	28.5	23.3	48.4
53	42.4	25.2	18.2	31.6
54	43.1	27.9	21.7	41.2
55	40.2	35.6	26.5	45.9

*NO36は破損しているため削除

偏斜測定値

重さ (g)	個数
60 ~	1
50.0 ~ 59.9	9
40.0 ~ 49.9	21
30.0 ~ 39.9	19
20.0 ~ 29.9	5

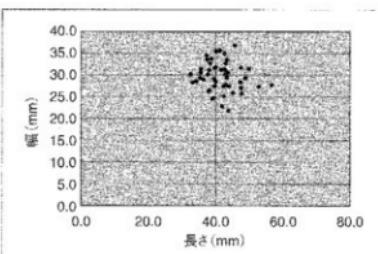
重さ別度数分布

(mm)	長さ(個)	幅(個)	厚さ(個)
60.0 ~	1		
50.0 ~ 59.9		3	
40.0 ~ 49.9		27	
30.0 ~ 39.9	23	29	1
20.0 ~ 29.9		25	44
10.0 ~ 19.9			9

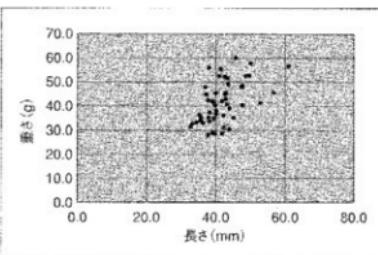
長さ・幅・厚さ別度数分布

	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
最大値	61.1	37.0	33.2	60.5
最小値	32.8	15.7	16.0	14.8
平均値	41.9	30.1	22.8	43.2

最大・最小・平均値



長さ・幅相関



長さ・重さ相関

第2表 Pit 1 内出土小標分析

部においては一次的な姿を留めている可能性もあるが、詳細については今後の検討課題である。また、平成11年度の調査においてこの土器窓からは、3枚もの貨泉（内1枚は窓内に納められる）や樂浪系の馬車具、ト骨等が出土しているため、近くに祭儀的な施設の存在が考えられたが、土器窓西側の地山は後世の削平をうけ遺構の確認はできなかった。

（6）集石遺構（第15図・第19図）

D区1号田河遺内で、人為的に石が集められた遺構を確認した。石の大半が角の取れた人頭大の円礫である。現地指導をうけた鎌田泰彦氏によると、壱岐島内の河川はどれも短く、しかも地形の関係で急流がないのでこのような礫が形成される可能性は低い。どこかの海岸からもってきたものと考えられる。また、礫のなかには明らかに壱岐島外のものである花崗岩系のものも3点確認したので、これらは北部九州から朝鮮半島まで含めた範囲の場所からもちこまれたものと考えられる。詳細な岩石鑑定による産地の特定が待たれる。集石内からの出土遺物から弥生中期後半の遺構と考えられるが、集石の目的については不明である。なお、遺構の南西部分は弥生後期の堆積層に覆われる。

（7）その他（第2表）

B区のはば中央、1号窓の西岸付近で繭人の小円礫を集めたPitを確認した（Pit1）。遺構自体は破壊をうけてわずかに残る底部以外は形を留めていない。確認した礫は55個にのぼる。長さ32.8~61.1mm、幅15.7~37.0mm、厚さ16.0~33.2mm、重さ14.8~60.5gである。表も示しているように重さのばらつきは大きいが、大きさはある程度まとまっている傾向にある。投弾用として集められた可能性が考えられる。時期については、それを示す遺物が確認できなかったのではっきりしたことは判らないが、層位的にみて弥生中期～後期のものと考えられる。

また、B区を中心に多くの柱穴状小穴を確認した。これまでの調査からもB区とその周辺地区は、石器工房等を併設する弥生前期末～中期末にかけての居住域とみられ、これらの小穴は簡易な掘立柱建物の柱穴と考えられる。河道に開まれた「輪中」的立地により堅穴住居は困難だったと考えられるからである。また、河道を挟んで隣接する北西側の微高地には、同じ時期に朝鮮半島系の人々の居住域と考えられる場所があり^{註1}、南西にはやはり河道を挟んで弥生中期の船着き場があるため、この地区に建てられた多くの簡易な掘立柱建物では、渡來した人々との民間レベルでの交渉・交易が行われた可能性も考えられる。この地区からは、前漢時代の五銖銭と三翼鏡、朝鮮系無文土器、樂浪系土器等の大邱や朝鮮半島からもたらされた遺物が数多く出土している。

註1 長崎県教育委員会1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集 参照

註2 長崎県教育委員会2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集 参照

註3 長崎県教育委員会1998『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集 参照

3. 遺 物

今回の調査では、コンテナ209箱分77,826点の遺物が出土した。その数量的な内訳は、土器・陶磁器76,190点、石器・石製品1,219点、金属製品3点、木製品2点、骨角製品1点、装飾品3点である。出土遺物の大半を占める土器・陶磁器から説明を行う。

(1) 土器・陶磁器

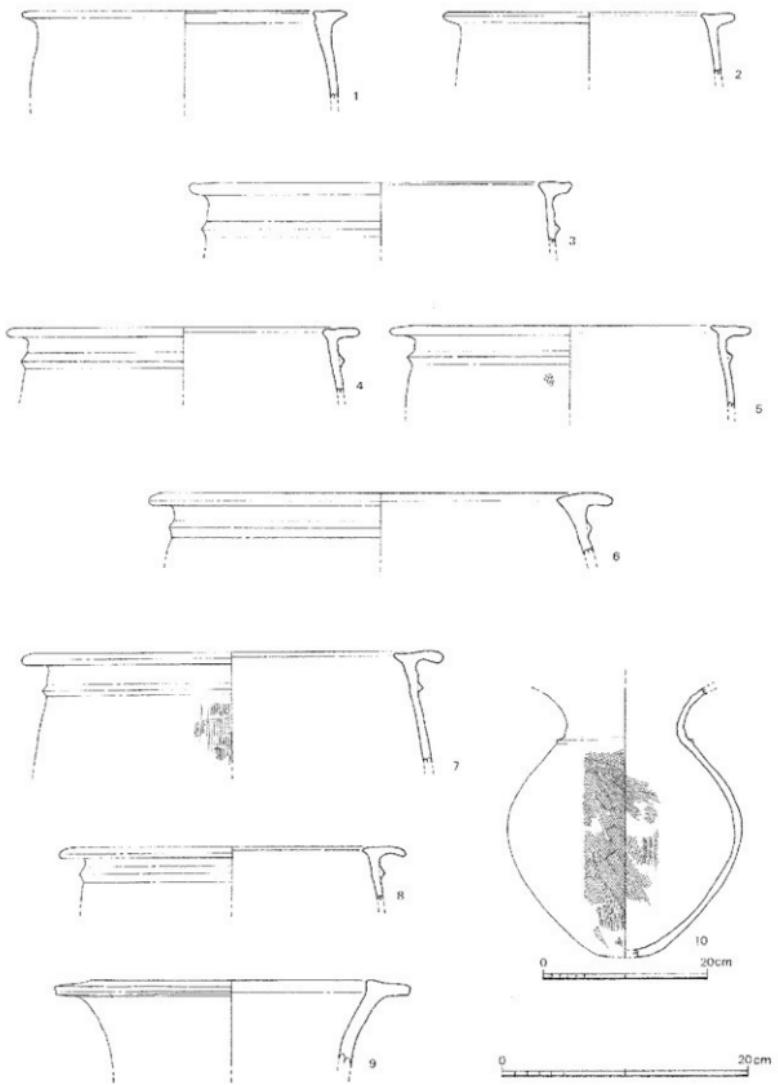
①D区1号旧河道V層出土土器（第20図・第21図）

1～8は逆L字形および鋤先形口縁の甕である。3～8は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。7は外面向にハケメ調整を行う。色調は1が橙色、2がにぶい赤褐色、3・5がにぶい褐色、4が褐色、6が明褐色灰色、7・8がにぶい橙色である。胎土にはいずれも石英・長石・金雲母を含む。須次I式古段階～須次II式の資料である。9～13は甕である。9が鋤先形口縁の甕、11が丹塗の袋状口縁長頸甕、12が複合口縁の長頸甕、13が「く」字形に外反する口縁の丹塗無頸甕である。10と12は、頸胴界に断面三角形の突帯をつけ、外面向にハケメ調整を行う。11は外面上には頸部にタテミガキ、口縁部にヨコミガキを施し、内面にしづり痕がみられる。13は口縁上方に2個ずつ対の焼成前の穿孔がみられ、外面上にヨコミガキを施す。色調は9がにぶい黄橙色、10が灰黄褐色、11が灰白色、12が明褐色灰色、13が橙色である。胎土には9・11・12・13が石英・長石・金雲母を含み、10が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。9・11・13が須次II式、10・12が弥生後期前半の資料であろうか。14・15は丹塗の蓋で、小さな孔が2個ずつ対にみられ、天井部には放射状にミガキが施されている。13のような無頸甕に使われたものであろう。14が灰白色、15が橙色の色調で、胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。16は楕円形の丹塗鉢である。外面上はヨコミガキされる。色調は明赤褐色で、胎土に石英・長石・金雲母を含む。いずれも弥生中期後半の須次II式の資料である。17～19は丹塗の高坏である。17は鋤先形口縁をもつ。18・19は口縁部を欠く。17は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。18は坏部外面上にヨコミガキ、脚部外面上にタテミガキ、19は脚部のみだが外面上にタテミガキを施し、内面にはしづり痕がみられる。色調は17・18がにぶい黄橙色、19が灰白色である。胎土にはいずれも石英・長石・金雲母を含む。いずれも弥生中期後半の須次II式の資料であろう。

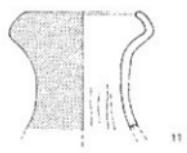
以上、D区1号旧河道V層出土土器は、弥生中期前葉の須次I式古段階～弥生後期前半までの様相をもつが、弥生後期前半の流路である可能性を示すものであろう。

②D区1号旧河道VI層出土土器（第22図）

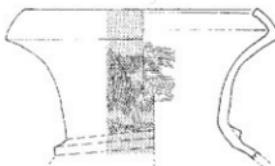
1～3は鋤先形口縁の甕である。1・3は胴上半に断面三角形の突帯をもち、外面上はハケメをナデ消している。いずれも色調はにぶい橙色、胎土には石英・長石・金雲母を含み、須次II式の資料である。4は跳ね上げ口縁の甕である。外面上にハケメ調整を行う。にぶい橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。福岡平野以東の土器である。5～7は「く」字形口縁の在地系甕である。いずれも外面上に、5・7は内面にもハケメ調整を行う。色調は5が灰褐色、6がにぶい褐色、7が褐色灰色で



第20図 D区1号旧河道V層出土土器① (1/4)



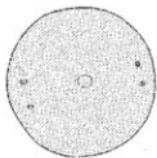
11



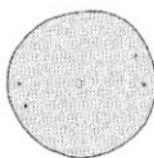
12



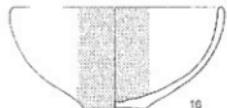
13



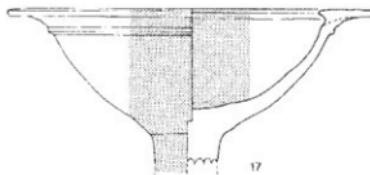
14



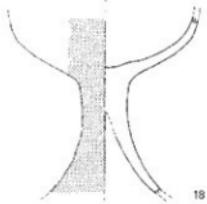
15



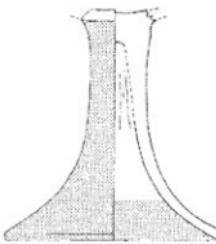
16



17

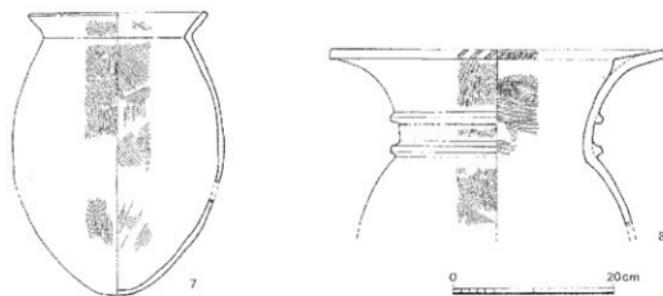
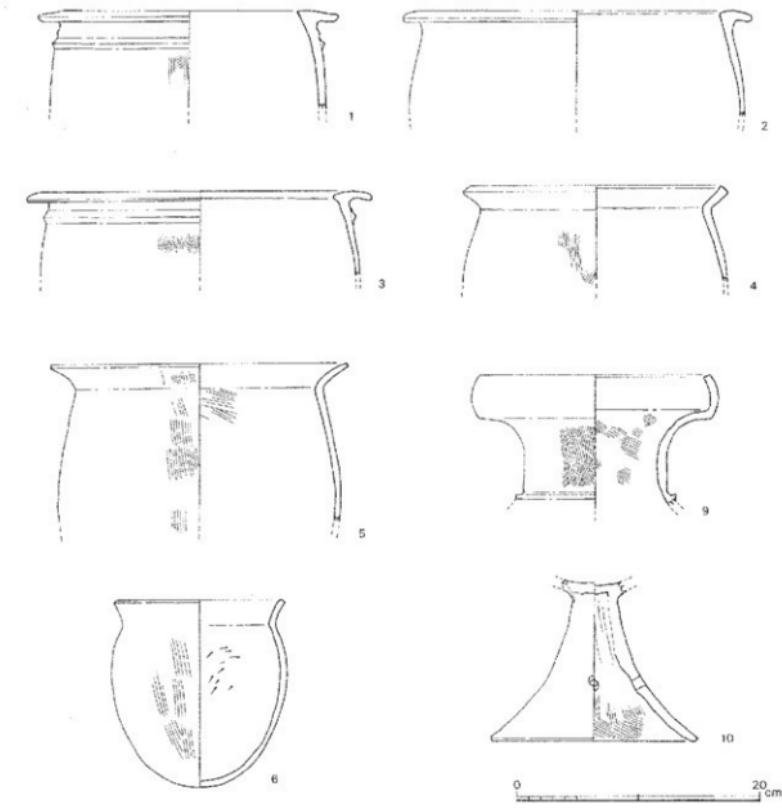


18



19

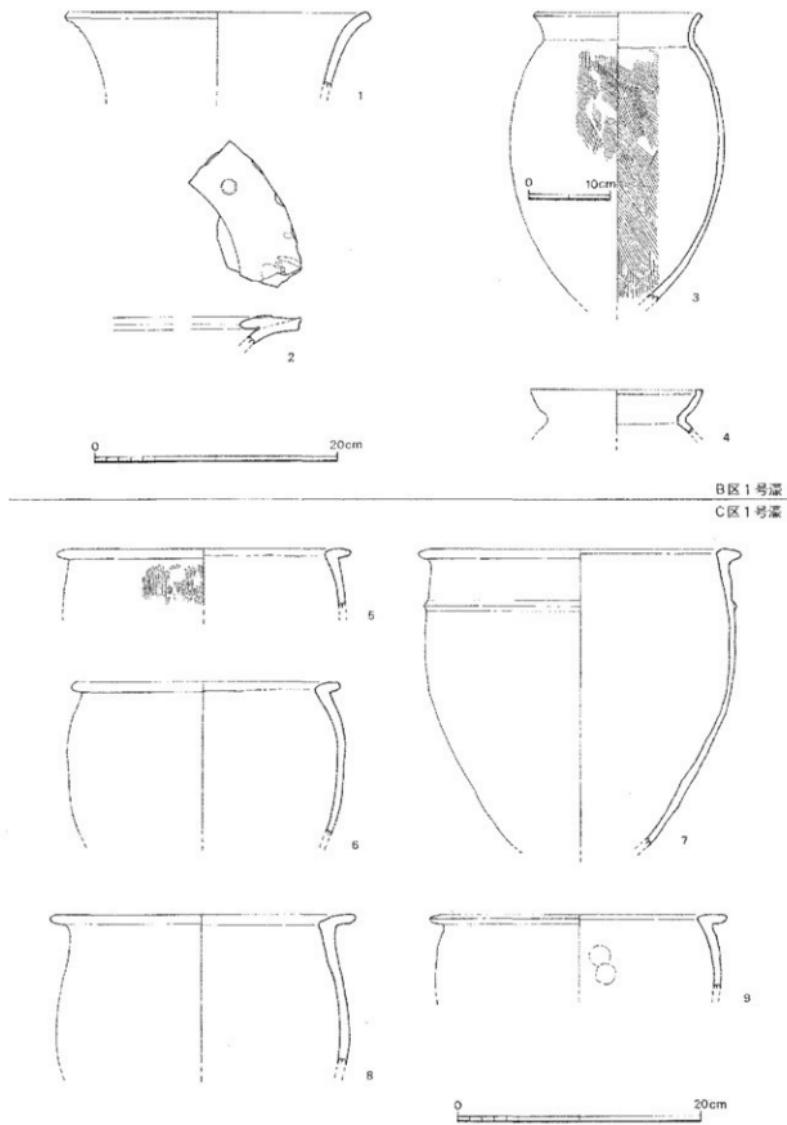
第21図 D区1号旧河道V層出土土器(2) (1/4)



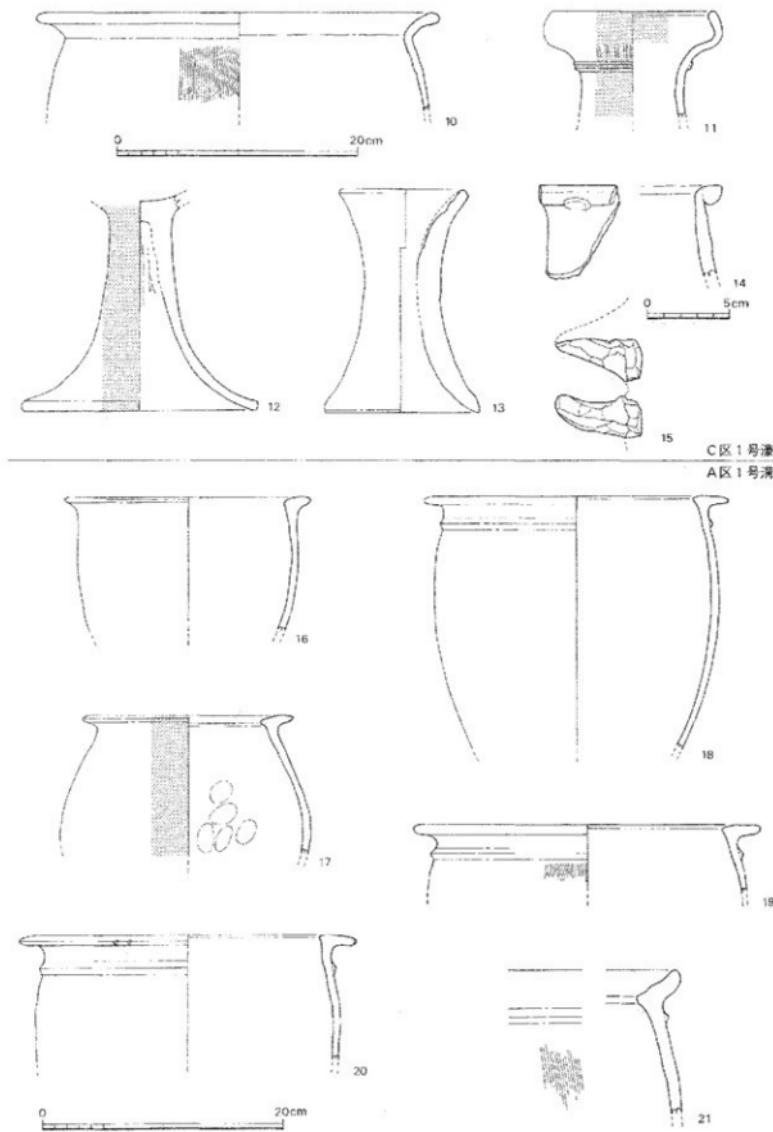
第22図 D区1号旧河道VI層出土土器 (1/4, 1/6)



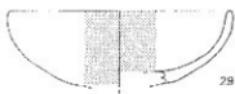
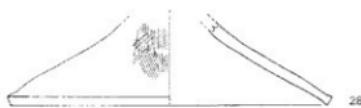
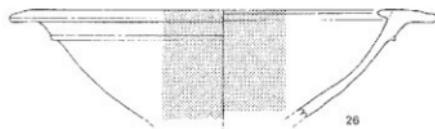
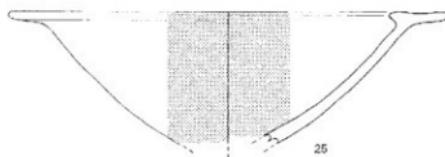
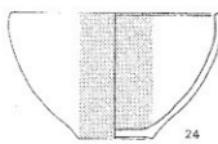
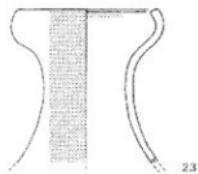
第23図 E区2号旧河道出土土器 (1/4)



第24圖 B区1号漆出土土器，C区1号漆出土土器① (1/4, 1/6)



第25図 C区 1号墓出土土器②、A区 1号墓出土土器① (1/3, 1/4)



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 cm

第26図 A区1号溝出土土器②(1/4)

ある。胎土にはいずれも石英・長石・金雲母を含む。古墳時代前期初頭の資料であろう。VI層でも最上部から出土した。8は大きく開く口縁部の内面に突起を有する壺で、口縁端部に刻み目を施し、頸胴界に断面三角形の突帯をつける。9は複合口縁の壺で、頸胴界と頸部に断面台形の突帯をつける。ともに内外面にはハケメ調整を行い、胎土には石英・長石・金雲母を含む。8は明褐色灰色、9はにぶい黄褐色の色調をもつ。いずれも弥生後期後半の資料であろう。10は高坏の脚部である。外面にタテミガキを施し、内面にはしづり痕とハケメがみられる。色調はにぶい橙色で、胎土に石英・長石・金雲母を含む。弥生後期前半の資料である。

以上、D区1号旧河道VI層出土土器は、弥生中期後半の須玖II式～古墳時代前期初頭までの様相をもち、河道内の複雑な擾乱を示す。今後は採り上げドットマップにより時期別の流路のゾーニングが課題となる。

③E区2号旧河道出土土器（第23図）

1～3は断面三角形の口縁、4～7は逆L字形および彌先形口縁の壺である。3・4・6・7は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。3は口縁端部に刻み目を施す。2・4・5は外面にハケメ調整を行う。色調は1がにぶい褐色、2が灰赤色、3・7がにぶい黄褐色、4が褐色灰色、5がにぶい橙色、6が灰褐色である。胎土は6が石英・長石、それ以外は石英・長石・金雲母を含む。1～3は城ノ越式、4～7は須玖I式～須玖II式の資料である。8は「く」字形口縁の壺である。外面はハケメをナデ消している。色調は灰褐色で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。弥生後期中葉の資料であろう。9・10は袋状口縁の丹塗長頸壺であるが、10は風化をうけ丹が剥離していない。9は頸部にM字突帯をめぐらし、瓶に細い暗文を施す。内面では頸部にしづり痕がみられる。10はL縁下に断面三角形の突帯をもち、頸部内面にしづり痕がみられる。色調は9がにぶい褐色、10が淡い橙色である。胎土には石英・長石・金雲母を含む。須玖II式の資料である。11は彌先形口縁の壺である。口縁端部に刻み目を施す。須玖I式古段階の資料である。

以上、E区2号旧河道出土土器は、弥生中期初頭の城ノ越式～弥生後期中葉の資料である。

④B区1号濠出土土器（第24図）

1は朝顔形に開く広口壺である。にぶい橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。須玖II式の資料であろう。2は彌先形口縁の壺である。口縁上面に円形浮文を張り付けている。色調は灰白色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。北部九州東都系の資料である。3は「く」字形口縁の壺である。内外面にハケメ調整を行う。灰褐色の色調で、胎土には石英・長石・赤色砂を含む。弥生後期後半の資料であろう。濠底から出土した。4は布留式壺である。色調は灰白色で、胎土に石英・金雲母を含む。IV層から出土した。柳田康雄氏編年³³⁾のII b式に相当する資料であろう。

以上、B区1号濠出土土器は、弥生中期後半の須玖II式～弥生後期後半の資料であるが、その出土状況から濠は弥生後期に掘られた。古墳時代前期には機能を失って埋没していったと考えられる。

⑤C区1号濠出土土器（第24図・第25図）

5・6・9は口縁が逆L字形に折れるが、口縁下方が巻き込むような処理をしており、朝鮮半島

系の擬無文土器の系譜をひく壺の可能性がある。5は外面にハケメ調整を行う。色調は5が灰黄色、6がにぶい褐色、9が灰黄褐色である。胎土は5が石英・長石・金雲母、6が石英・長石・金雲母・赤色砂、9が石英・長石を含む。7は断面三角形の口縁の壺である。胴上半に断面三角形の突帯をもつ。にぶい褐色の色調で、胎土には石英・長石を含む。城ノ越式の資料である。8は逆L字形口縁の壺である。色調は灰褐色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。須玖I式の資料である。10は「く」字形口縁の壺である。外面にハケメ調整を行う。橙色の色調で、胎土は石英・長石・金雲母を含む。弥生後期前半の資料であろう。11は袋状口縁の丹塗長颈壺である。頸部にM字突帯をめぐらし、口縁下方に暗文が残る。色調は橙色で、胎土には石英・長石を含む。12は丹塗の高杯の脚部である。内面にしづら痕がみられる。淡い黄褐色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。13は器台である。色調はにぶい橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。14は朝鮮系無文土器壺である。丸い粘土糰口縁の壺で、一部指で押えた痕跡がつく。外面は平滑に仕上げ、内面は横位にナデ仕上げしている。にぶい褐色の色調で、胎土には石英を含む。15は同じく無文土器の牛角把手付壺の把手である。色調はにぶい黄褐色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。

以上、C区1号漆出土土器は、弥生中期初頭の城ノ越式～弥生後期前半の資料であるが、遺物は覆七の上半からのみ出土しており、また隣接して城ノ越式や須玖II式の資料をもつ遺構もあり、これらの上器は漆が埋没する過程で混入したものと考えられる。

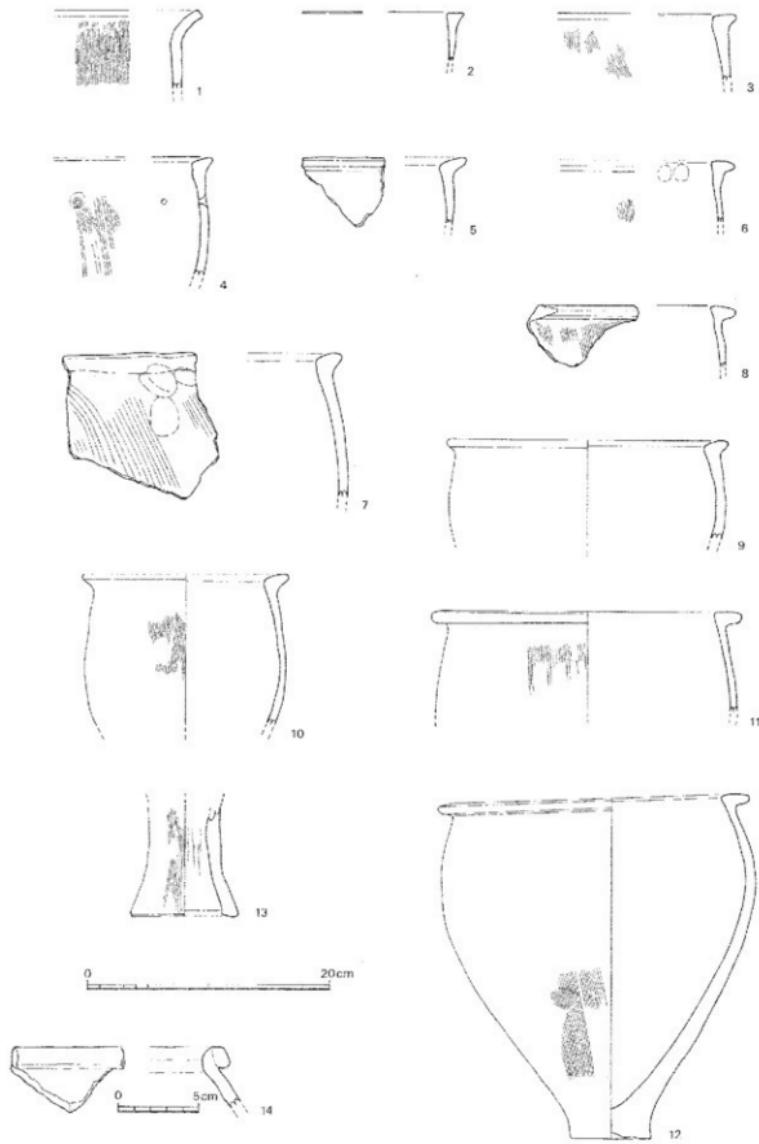
⑥A区1号漆出土土器（第25図・第26図）

16は断面三角形の口縁の、17～20・22は逆L字形および鶴先形口縁の、21は口縁が内湾する、それぞれ壺である。17は外面は丹塗でヨコミガキを施す。18～22は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。20は口縁端部に2箇所刻み目を施す。19・21・22の外向にはわずかにハケメが残る。色調は16・17・20にぶい橙色で、18がにぶい黄褐色、19がにぶい赤褐色、21が橙色、22がにぶい褐色である。胎土には16が石英・長石、それ以外が石英・長石・金雲母を含む。16は城ノ越式、それ以外は須玖II式の資料であろう。23は袋状口縁の丹塗長颈壺である。外面はミガキを施す。にぶい橙色の色調で、胎土には石英・長石を含む。24は楕円形の丹塗鉢である。色調はにぶい黄褐色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。25・26は鶴先形口縁の丹塗高杯の脚部である。26は上半に断面三角形の突帯をもつ。25が淡い黄褐色で、26が灰黄褐色の色調である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。27・28は高杯の脚部である。27は外面はハケメをナデ消し、内面にはしづら痕がみられる。28は外面にハケメ調整を行う。色調は27が橙色、28がにぶい橙色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。29は浅い椀形をしている高杯の脚部と考えられる。にぶい橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。23～29は須玖II式の資料であろう。

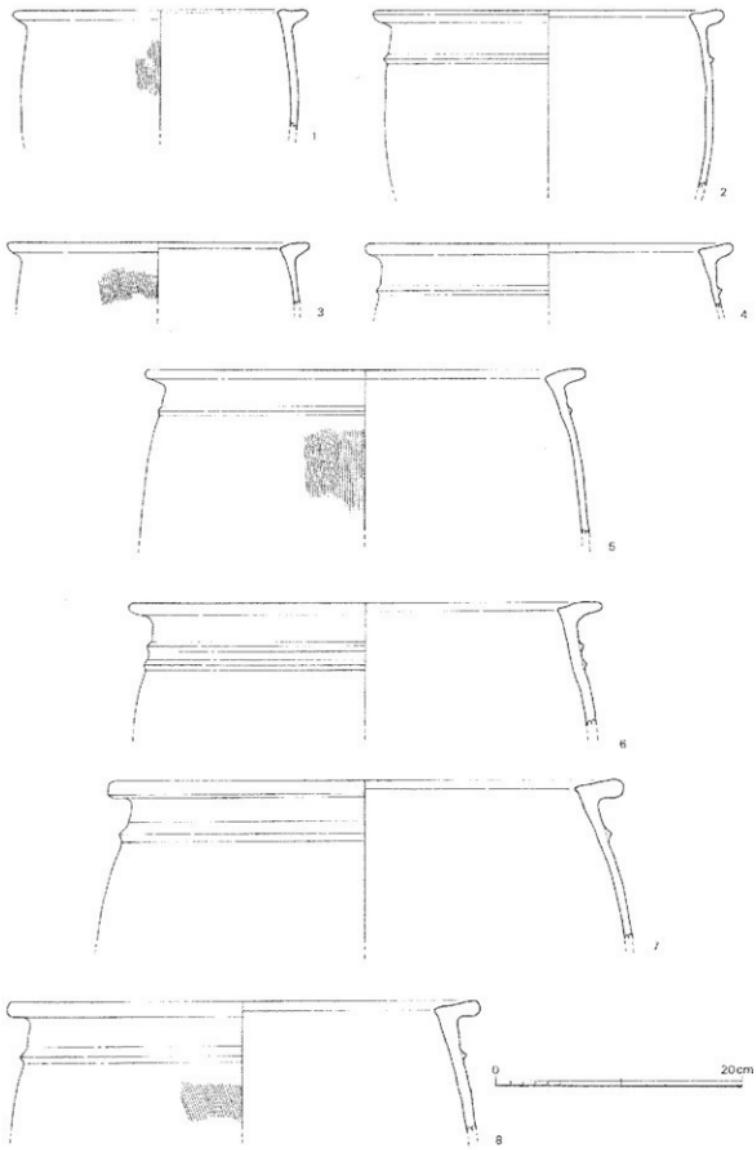
以上、A区1号漆出土土器は、弥生中期後半の須玖II式を主体とする資料である。

⑦B区2分漆出土土器（第27図）

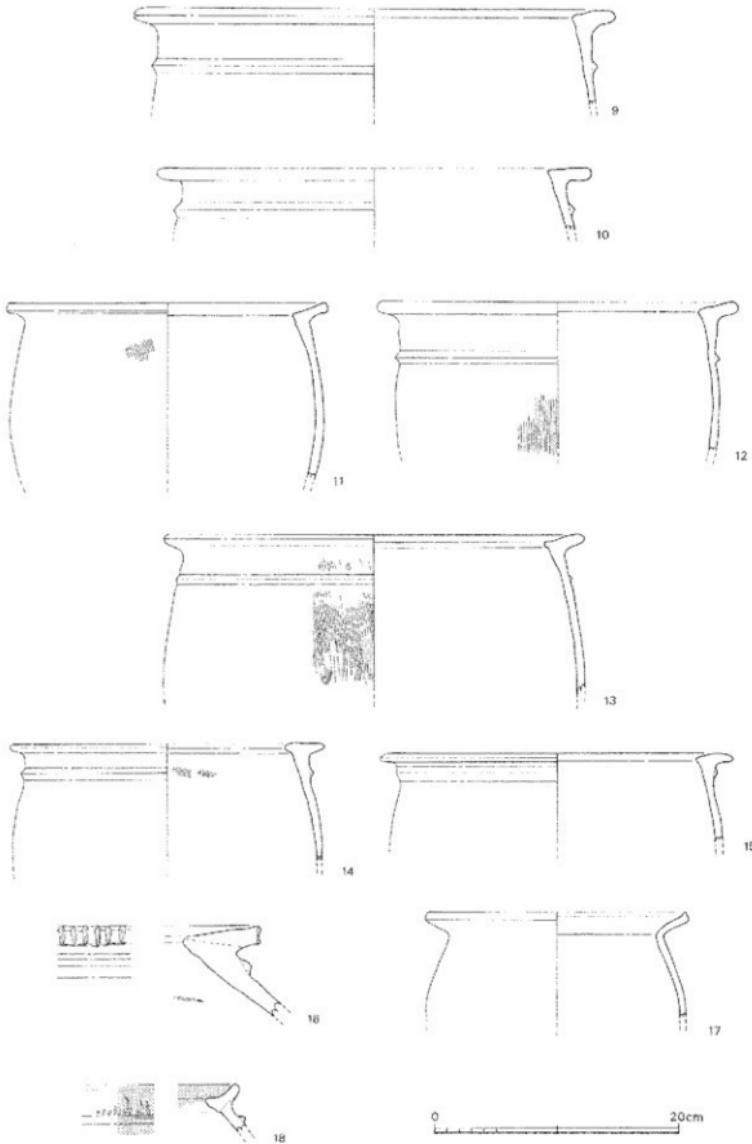
1は如意形口縁の壺である。外面にハケメ調整を行う。にぶい黄褐色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。板付IIb式の資料であろう。2～10は断面三角形の口縁の壺である。5・9を除



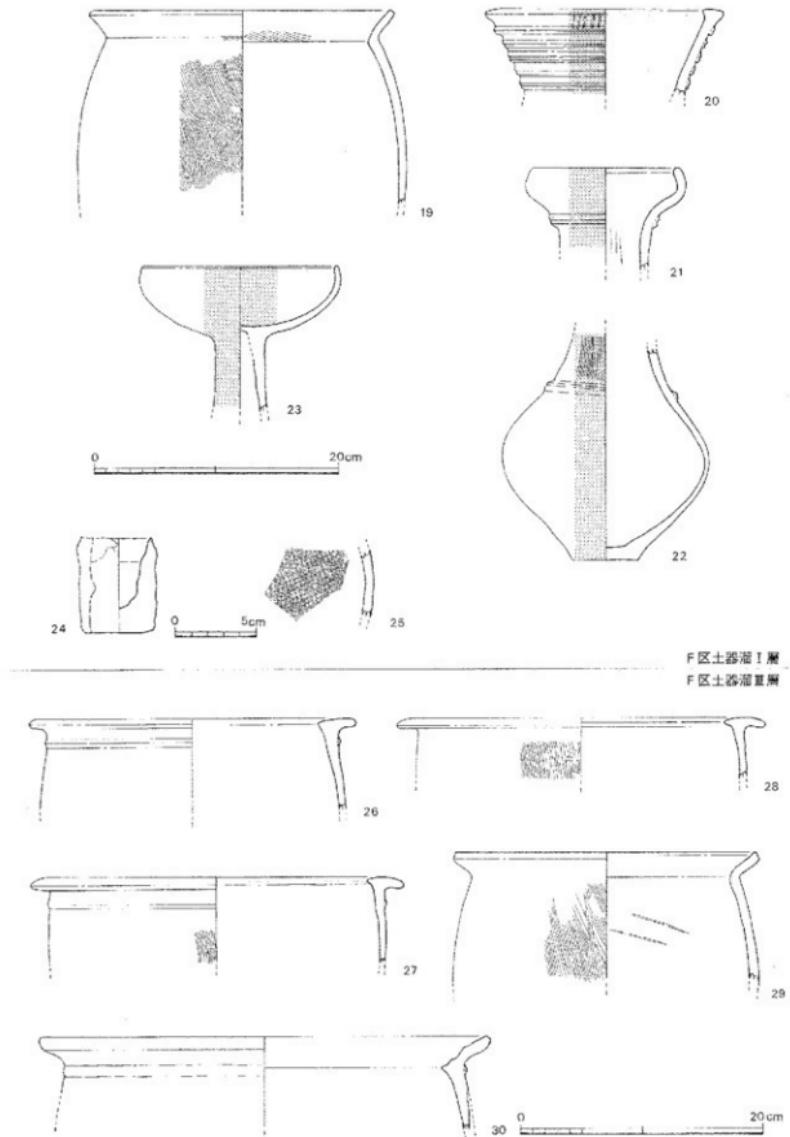
第27図 B区2号溝出土土器 (1/3, 1/4)



第28図 F区土器層I層出土土器① (1/4)



第29図 F区土器溜I層出土土器② (1/4)



第30図 F区土器層Ⅰ層出土土器③, F区土器層Ⅲ層出土土器① (1/3, 1/4)

き、外面にハケメ調整を行う。4は胴部に焼成後の穿孔がある。6の内面、7の外面には指圧痕が残る。色調は2が灰白色、3・9がにぶい黄橙色、4・7が灰黄褐色、5がにぶい黄褐色、6が褐灰色、8が橙色、10が黄灰色である。胎土には4が石英・金雲母、5が石英・長石・金雲母・角閃石、それ以外が石英・長石・金雲母を含む。いずれも城ノ越式の資料である。11・12は短い逆L字形の口縁の壺である。ともに外面にハケメ調整を行う。11がにぶい橙色、12が明褐灰色の色調で、胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。須玖I式古段階の資料であろう。13は器台である。外面にハケメ調整を行う。にぶい黄橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。14は朝鮮系無文土器の資料で、丸い粘土紐口縁の壺である。色調はにぶい黄橙色。胎土に石英・長石を含む。

以上、B区2号溝出土土器は、弥生前期末の板付IIb式～弥生中期初頭の城ノ越式を主体とする資料である。

⑧F区土器溜1層出土土器（第28図～第30図）

1～15は逆L字形および鈎先形口縁の壺である。1・3・5・8・11・12・13は外面に、14は内面にハケメ残る。2・4～10・12～15は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。色調は1・6・8・14が橙色、2・7・9・12がにぶい褐色、3がにぶい橙色、4・13がにぶい赤褐色、5が褐灰色、10・11が灰褐色、15が明黄褐色である。胎土には1・3・6・15が石英・長石・金雲母、2・4・5・7・8・9・12・13・14が石英・長石・金雲母・角閃石、10・11が石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。須玖I式古段階～須玖II式の資料であろう。16は逆L字形に近い口縁の壺植破片である。口縁端部に刻み目を施し、口縁直下に断面三角形の突帯をもつ。にぶい黄橙色の色調で、石英・長石・金雲母を胎土に含む。立岩式の資料であろう。17は跳ね上げ口縁の壺である。外面はハケメをナデ消している。色調は橙色で、胎土に石英・長石を含む。福岡平野以東の上器である。18は口縁が内湾する丹塗の壺である。口縁下方に暗文を施す。断面三角形の突帯をもつ。にぶい黄橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。19は「く」字形口縁の壺である。内外面にハケメ調整を行う。色調はにぶい橙色で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。弥生後期前半の資料であろう。20は多条のM字突帯を施す丹塗壺である。口縁下方に暗文を施す。にぶい黄橙色の色調で、胎土には長石を多く含んでいる。北部九州東部地域系の資料と考えられる。21・22は袋状口縁の丹塗長頸壺である。21は口縁下に、22は頸胴界にM字突帯を施す。21は内面にしぼり痕がみられ、22は頸部にハケメが残る。色調は21がにぶい橙色、22が灰黄褐色である。胎土には21が石英・長石・金雲母・角閃石、22が石英・長石・金雲母を含む。23は浅い椀状の坏部をもつ丹塗高坏である。色調はにぶい橙色で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。24は朝鮮半島系の瓦質土器と考えられる。手づくねで、用途不明。黄灰色の色調で、胎土には角閃石を含む。25は三韓系瓦質土器断片である。外面に格子目タタキを施し、褐灰色を呈する。

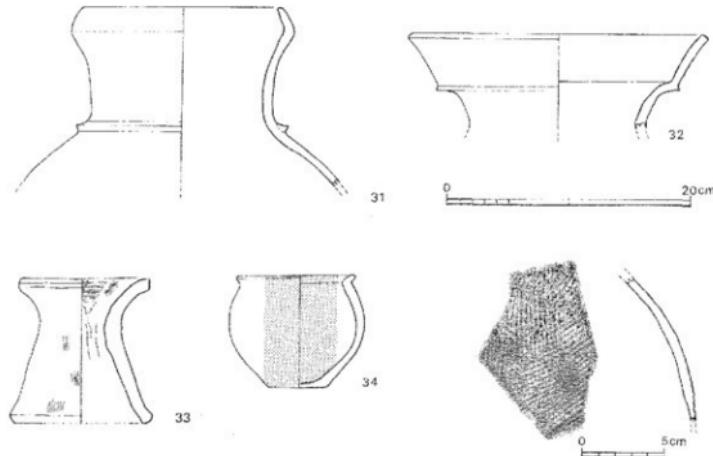
以上、F区土器溜1層出土土器は、弥生中期前葉の須玖I式古段階～弥生後期前半の資料である。

⑨F区土器溜Ⅲ層出土土器（第30図・第31図）

26～28は鈎先形口縁の壺である。26・27は胴部上端に断面三角形の突帯をもつ。26は外面のハケメ

をナデ消す。27・28は外面にハケメが残る。色調は26が灰褐色、27がにぶい黄橙色、28が灰黄色である。胎土には26・27が石英・長石・金雲母、28が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。いずれも須玖Ⅱ式古段階の資料であろう。29は跳ね上げ口縁の壺である。外向にハケメ調整を行う。明褐灰色の色調で、石英・長石・金雲母を胎土に含む。福岡平野以東の土器である。30は逆L字形口縁の壺である。口縁はかなり立ち上がり、口縁直下に丸みを帯びた断面三角形の突帯をもつ。色調はにぶい橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。31は「く」字形に内反する口縁の複合口縁壺である。頸胴界に断面三角形の突帯をもつ。灰白色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期初頭の資料であろう。32は山陰系の二重口縁壺である。色調はにぶい黄褐色で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。33は器台である。外面はハケメをナデ消す。内面ではハケメとしづり痕がみられる。明褐灰色の色調で、胎土には石英・長石を含む。34は広口の單口縁の舟塗小壺である。外向にはヨコミガキを施す。色調は橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。35は楽浪系瓦質土器壺片である。外面は純胎文タキを施し、内面は當て具痕をナデ消す。褐灰色を呈する。

以上、F区土器溝Ⅲ層出土土器は、弥生中期中葉の須玖Ⅱ式古段階～弥生後期初頭を主体とする資料である。山陰系の二重口縁壺は、この層が弥生後期～古墳前期の河道に接しているため、混入したものと考えられる。



第31図 F区土器溝Ⅲ層出土土器② (1/3, 1/4)

⑩F区土器滻IV層出土上土器（第32図）

1～5は逆L字形および鋤先形口縁の壺である。3・5は胴部上端に断面三角形の突帯をもつ。1は外面のハケメをナデ消す。色調は1が褐灰色、2が赤橙色、3が灰白色、4がにぶい赤褐色、5が明褐色である。いずれも胎土には石英・長石・金雲母を含む。これらは須次I式古段階～須次II式新段階の資料であろう。6は口縁が内湾気味に立ち上がる口縁の壺である。胴部上端に断面三角形の突帯をもつ。外面にハケメ調整を行う。明褐灰色の色調で、胎土には石英・長石を含む。7・8は跳ね上げ口縁の壺である。7はハケメ調整を行う。色調は7が褐灰色で、8が橙色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。福岡平野以東の土器である。9は口縁部が逆ハの字形に開く壺である。肩曲部に断面三角形の突帯をもつ。外面はハケメをナデ消す。明赤褐色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期初頭の資料であろう。10は瓢箪形の壺の胴部である。M字突帯とM字の下方の突起がより突き出たように変化したと思われる突帯が巡る。色調はにぶい橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。11は鋤先形口縁壺で、にぶい橙色の色調をもつ。胎土には石英・長石・金雲母を含む。12は丹塗の高环の脚部である。外面にタテミガキを施す。色調は黄橙色で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。

以上、F区土器滻IV層出土土器は、弥生中期前葉の須次I式古段階～弥生後期初頭の資料である。

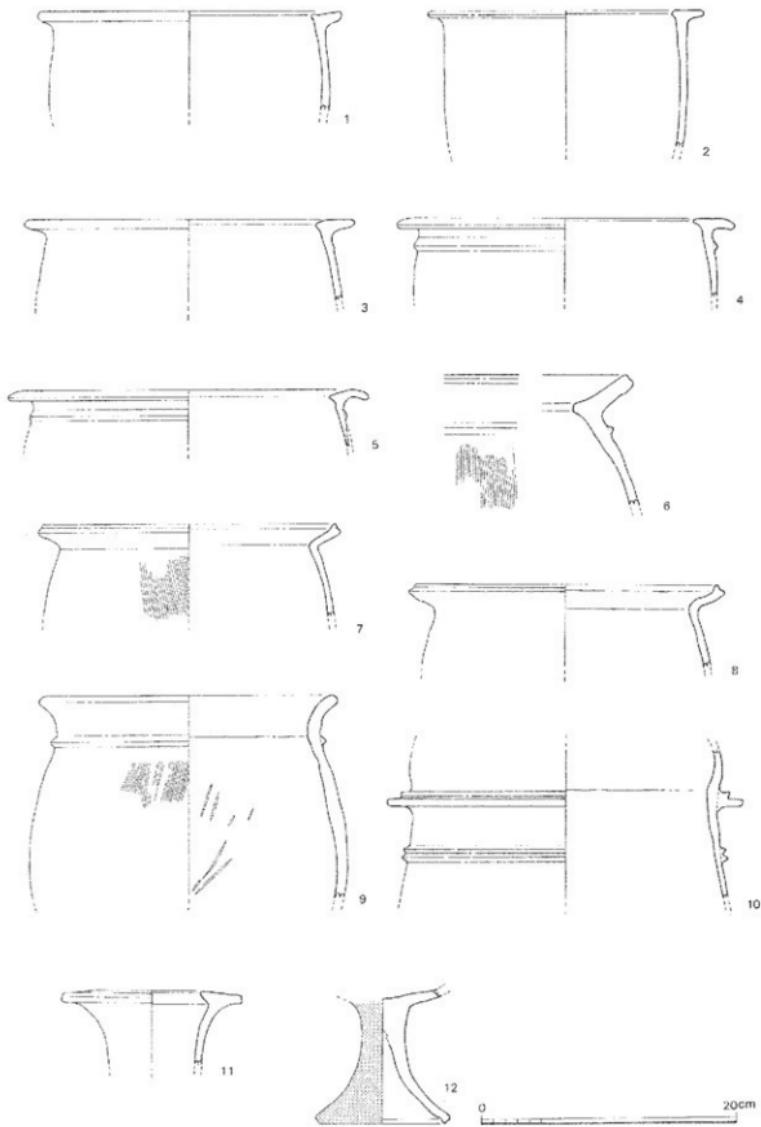
⑪F区土器滻V層出土土器（第33図）

1～5は逆L字形および鋤先形口縁の壺である。5は胴部上半に断面三角形の突帯をもつ。1は外面のハケメをナデ消す。2・3は外面にハケメ調整を行う。色調は1が橙色、2が灰黄褐色、3が赤灰色、4がにぶい橙色、5が褐灰色である。胎土にはいずれも石英・長石・金雲母を含む。須次I式古段階～須次II式の資料である。6は「く」字形口縁の壺である。内外面ともにハケメ調整を行う。橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期後半の資料であろう。7は鋤先形口縁の壺である。口縁端部に刻み目を施し、頸胴界にM字突帯をもつ。頸部にヨコミガキを施す。浅黄色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。8は大きく開く口縁部の内面に突起を有する壺である。口縁端部に刻み目を施し、頸胴界に台形状の突帯をもつ。色調は橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期後半の資料であろう。9は支脚である。にぶい黄橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。

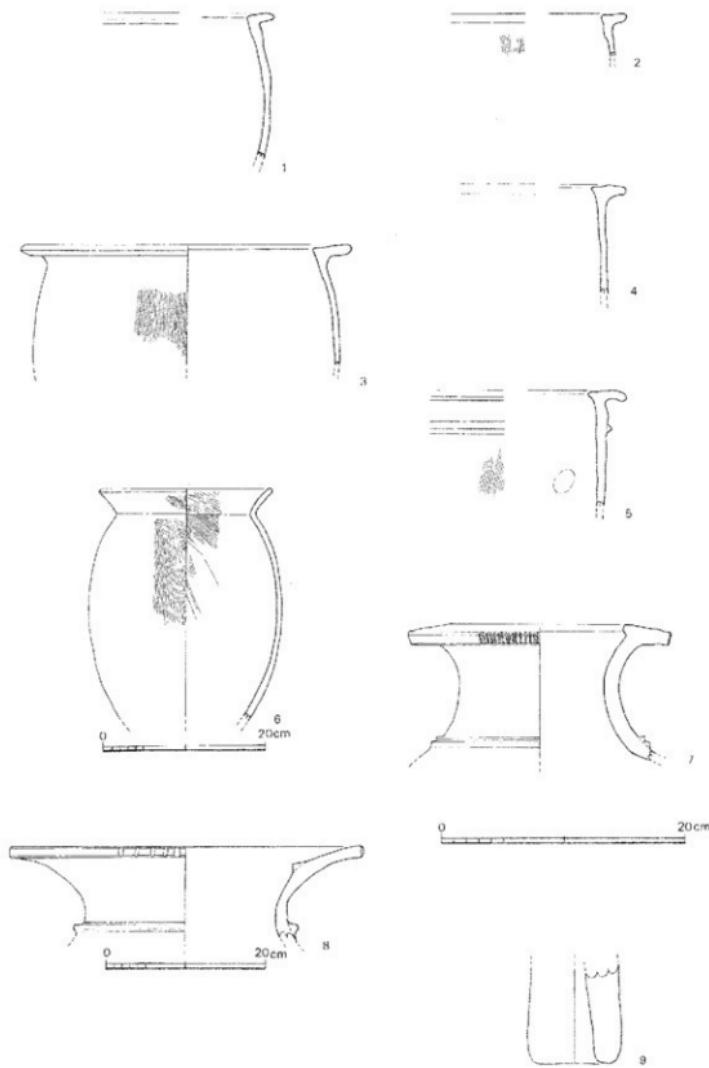
以上、F区土器滻V層出土土器は、弥生中期前葉の須次I式古段階～弥生後期後半の資料である。

⑫F区土器滻VI層出土土器（第34図・第35図）

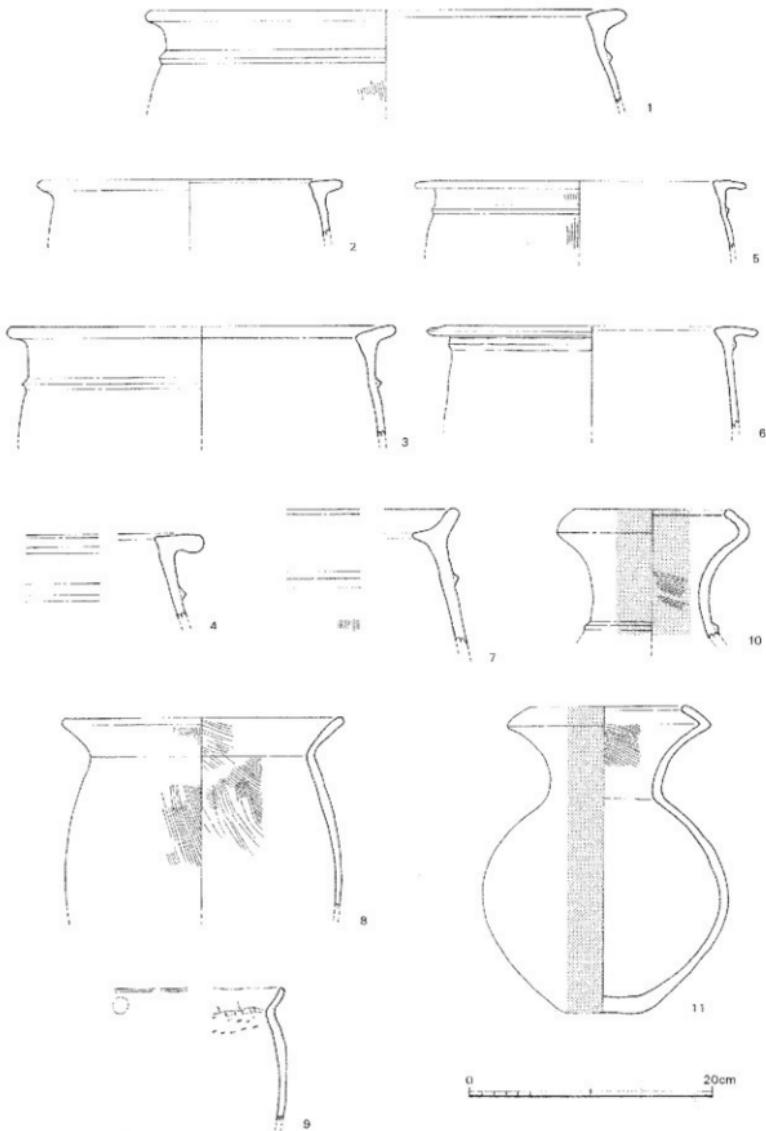
1～6は逆L字形および鋤先形口縁の壺である。2を除き、断面三角形の突帯を1条つけている。1・5は外面のハケメをナデ消すが、わずかにハケメが残る。色調は1が橙色、2が灰黄色、3が灰褐色、4がにぶい橙色、5が明赤褐色、6がにぶい黄橙色である。胎土には3を除き、石英・長石・金雲母を含み、3は石英・長石・金雲母・角閃石を含む。須次I式古段階～須次II式の資料である。7はT字形の口縁が内湾する壺である。外面にはわずかにハケメが残り、断面三角形の突帯を1条つけている。色調は橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。8・9は「く」字形口縁の壺である。8



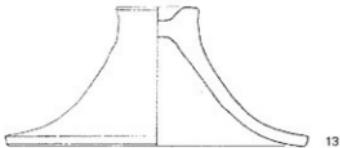
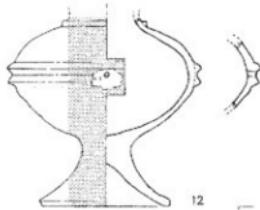
第32図 F区土器洞IV層出土土器 (1/4)



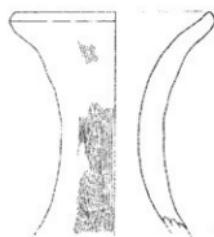
第33図 F区土器層V層出土土器 (1/4, 1/6)



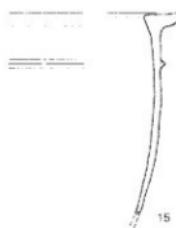
第34図 F区土器窯VI層出土土器① (1/4)



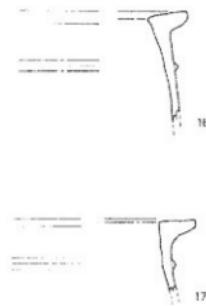
E区土器层VI层
E区土器层VII层



14



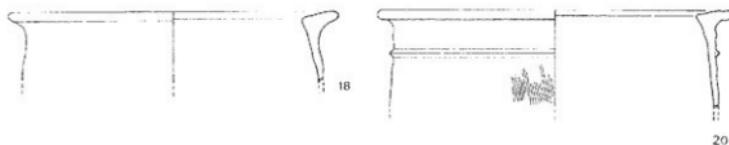
15



16



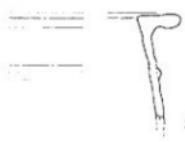
17



18



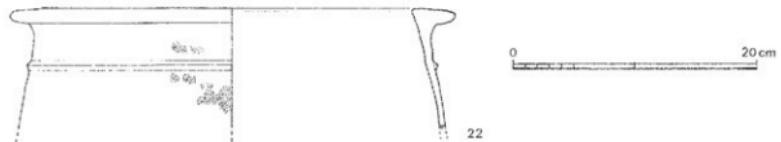
19



20



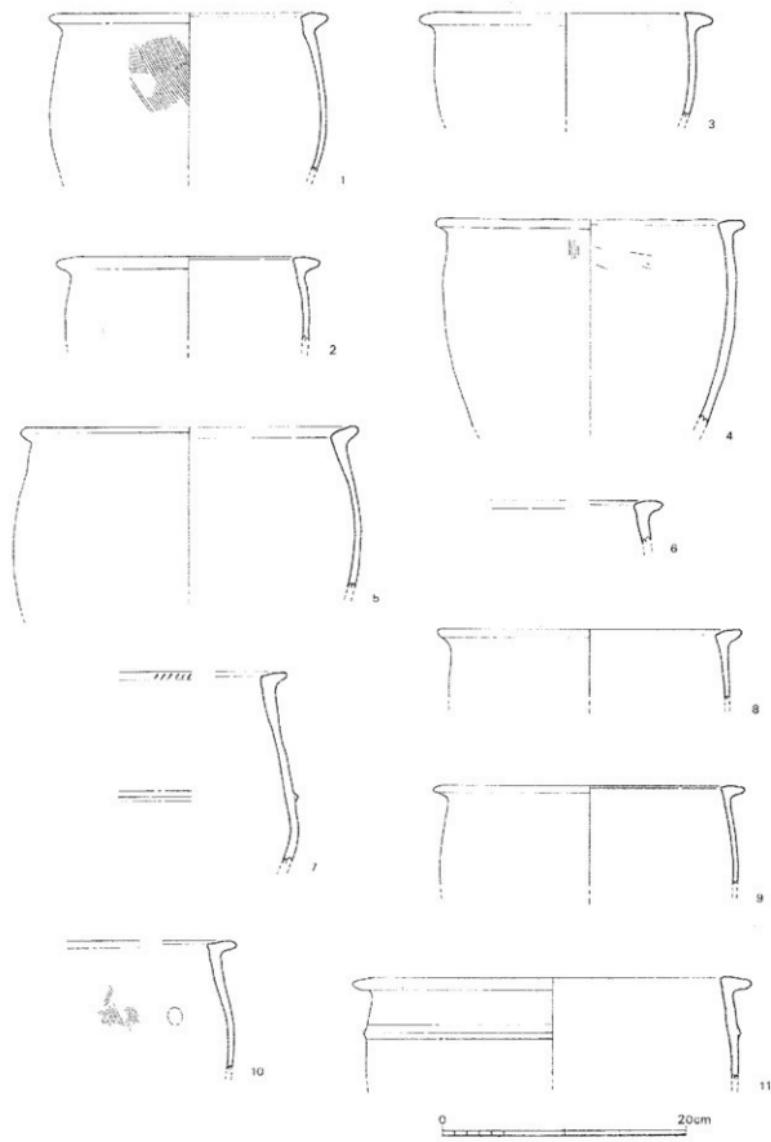
21



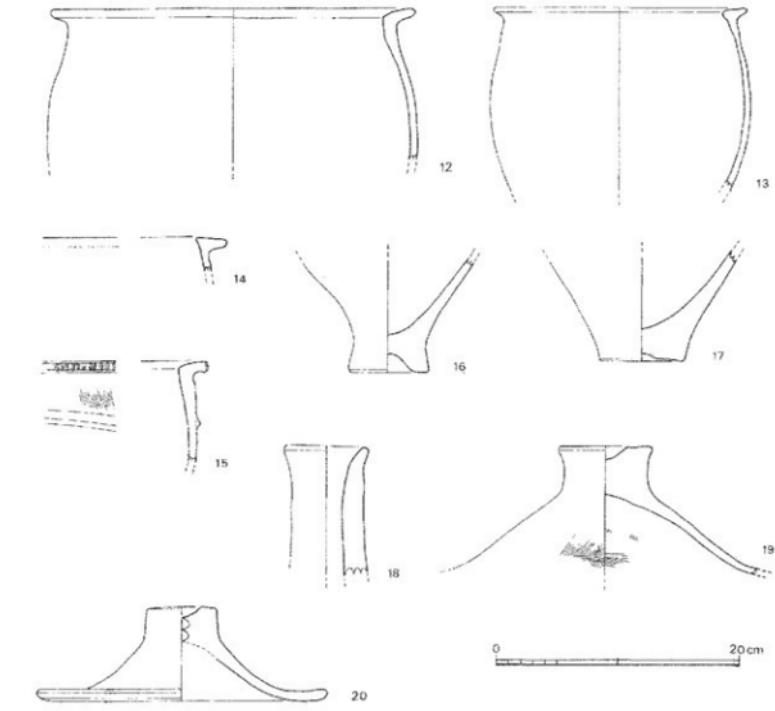
22

0 20 cm

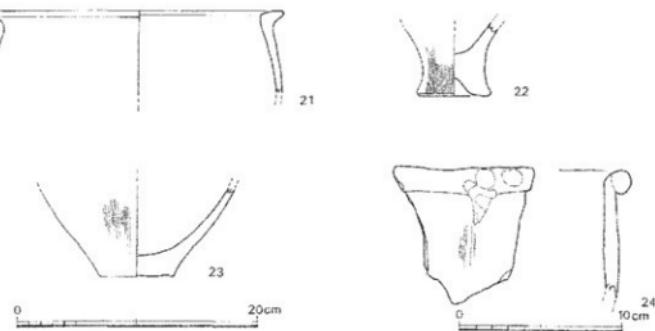
第35图 F区土器层VI层出土土器(2)、F区土器层VII层出土土器(1/4)



第36図 C区落ち込み1出土土器① (1/4)



C区落ち込み 1
C区落ち込み 2

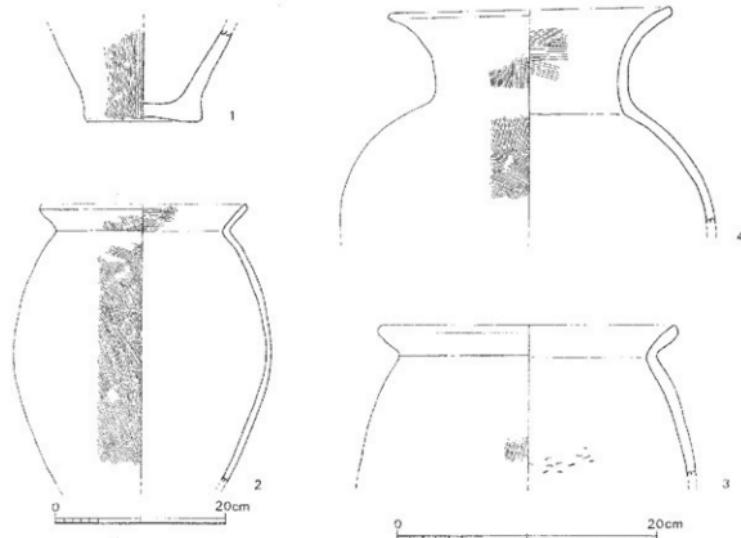


第37図 C区落ち込み 1 出土土器②, C区落ち込み 2 出土土器 (1/3, 1/4)

は内外面にハケメ調整を行う。9は屈曲部外面に指圧痕がみられ、屈曲部内面にはヘラケズリ痕とヘラ刺突痕が残る。色調は8が橙色、9がにぶい黄橙色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。8が弥生後期後半の資料、9は朝鮮半島系の擬撫文土器の系譜をひく窓の可能性がある。10・11は内湾気味に屈曲する口縁をもつ丹塗壺である。10は頸胴界に台形状の突帯をもつ。11は外面にタテミガキを施す。内面にはともにハケメ調整を行う。色調は10がにぶい黄橙色、11が灰白色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。弥生後期前半の資料である。12は注口の台付丹塗壺である。断面三角形の2条の突帯間の注口が剥落した痕跡が認められる。孔は貫通している。にぶい黄橙色の色調で、胎土は石英・長石を含む。13は蓋である。にぶい橙色を呈し、胎土には石英・長石・金雲母を含む。14は器台である。外面はハケメ調整を行う。色調はにぶい黄橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。

以上、F区土器溜VI層出土土器は、弥生中期前葉の須須1式古段階～弥生後期後半の資料である。
 ⑩F区土器溜VII層出土土器（第35図）

15～22は逆L字形口縁の窓である。18を除き、胴部に断面三角形の突帯を1条つけている。20・22の外面にわずかにハケメが残る。色調は15がにぶい赤褐色、16が灰黄褐色、17・21が橙色、18が褐色、19が褐灰色、20がにぶい褐色、22がにぶい棕色である。胎土には17・20を除き、石英・長石・金雲母を含み、17・20は石英・長石・金雲母・角閃石を含む。



第38図 D区集石造構試掘出土土器（1/4, 1/6）

以上、F区土器層Ⅶ層出土土器は、弥生中期前葉の須玖I式古段階～弥生中期後半の須玖II式の資料である。また、F区土器層出土土器を取り上げ層位ごとに細かく検証してきたが、Ⅶ層を除き、各取り上げ層が弥生中期前葉・中葉～弥生後期の資料であった。これは、この上春層が時間的推移のもとで形成された一次的なものではなく、別に形成されていた一次的なものが数度にわたり崩されて層位をなした二次的なものであることを示していると考えられる。今回この上器層調査した中での最下層にあたるⅧ層の解釈については今後の検討課題である。

④C区落ち込み1出土土器（第36図・第37図）

1～3・6は断面三角形の口縁の壺である。1は外面にハケメ調整を行う。色調は1・2・6がにぶい橙色、3が澄色である。胎土には3が石英・長石、他が石英・長石・金雲母を含む。城ノ越式の資料である。4・5・7～15は逆L字形および鈎先形口縁の壺である。7・15は口縁端部に刻み目を施す。7・11・15は胴部に断面三角形の突帯を1条ついている。4・10・15は外面にわずかにハケメが残る。色調は4が褐灰色、5・6がにぶい橙色、7がにぶい赤褐色、8・12が明褐灰色、9・11・13が灰褐色、10・15がにぶい褐色、14が明褐色である。胎土には4・5が石英・長石・金雲母・角閃石、7・8・9・10・14・15が石英・長石・金雲母、11～13が石英・長石を含む。城ノ越式～須玖I式の古段階の資料であろう。16・17は壺の底部である。16が淡い黄橙色、17が灰白色の色調である。胎土には16が石英・長石、17が石英・長石・金雲母・角閃石・赤色砂を含む。城ノ越式と須玖I式の資料である。18は支脚である。橙色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。19・20は蓋である。19は内外面にハケメが残る。色調は19が褐灰色、20がにぶい黄橙色である。胎土にはとともに石英・長石・金雲母を含む。須玖I式古段階の資料であろう。

以上、C区落ち込み1出土土器は、弥生中期初頭の城ノ越式～弥生中期前葉の須玖I式古段階の資料である。この落ち込みは、平成11年度特定調査B区の3号土壙の下層部分に繋がると考えられる。

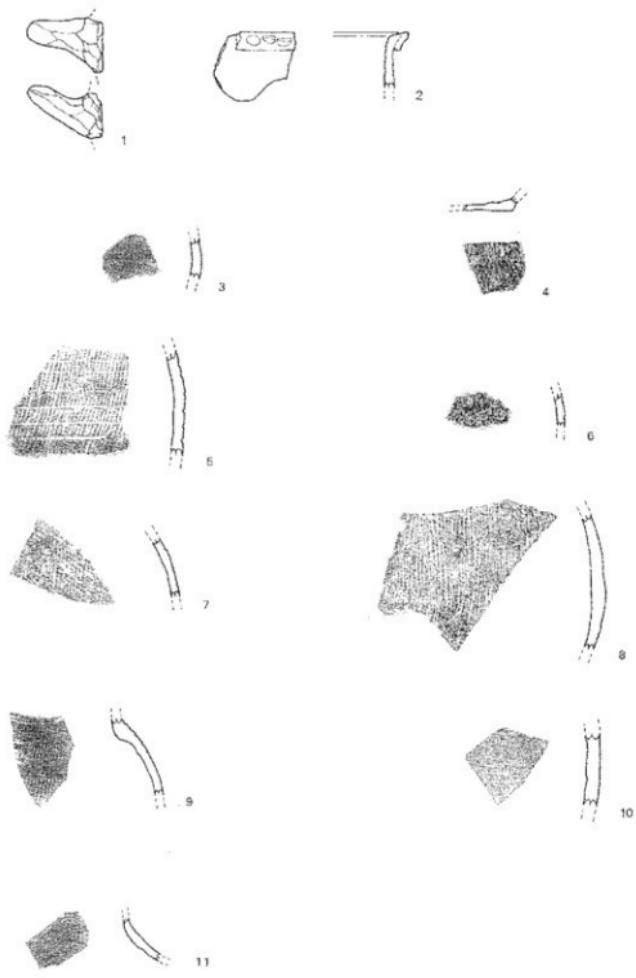
⑤C区落ち込み2出土土器（第37図）

21は断面三角形の口縁の壺である。赤褐色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。城ノ越式の資料であろう。22・23は壺の底部である。いずれも外面にハケメ調整を行う。22が澄色、23が明赤灰色の色調で、胎土には22が石英・長石・金雲母、23が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。城ノ越式と須玖II式の資料であろう。24は朝鮮系無文土器の資料で、丸い粘土紐口縁の壺である。外面の一部に指圧痕とかすかにハケメが残る。灰黄褐色の色調で、胎土には石英・金雲母を含む。

以上、C区落ち込み2出土土器は、城ノ越式～須玖II式の資料である。

⑥D区集石遺構試掘層出土土器（第38図）

1は壺の底部である。外面はハケメ調整を行う。色調は明褐灰色で、胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。須玖II式の資料であろう。5層から出土した。2・3は「く」字形口縁の壺である。2は内外面ともにハケメ調整を行う。3は外面のハケメをナデ消すが、わずかにハケメが残る。内面にはヘラ刺突痕が残る。2はにぶい黄褐色、3はにぶい黄橙色の色調で、胎土には2が石英・長石・金雲母・角閃石・赤色砂、3が石英・長石・金雲母を含む。4は朝顔形に聞く口縁の広口壺である。



0 20cm

第39図 朝鮮半島系出土土器 (1/3)

内外面ともにハケメ調整を行う。色調は淡い黄橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。2が弥生後期後半、3が弥生後期前半、4が弥生後期中頃の資料であろう。いずれも1b層から出土した。

以上、D区集石遺構試掘出土土器は、集石遺構内の層である5層の出土土器は弥生中期後半の須玖II式、集石遺構を覆うように堆積した1b層の出土土器は弥生後期前半～弥生後期後半の資料である。

⑦朝鮮半島系出土土器（第39図）

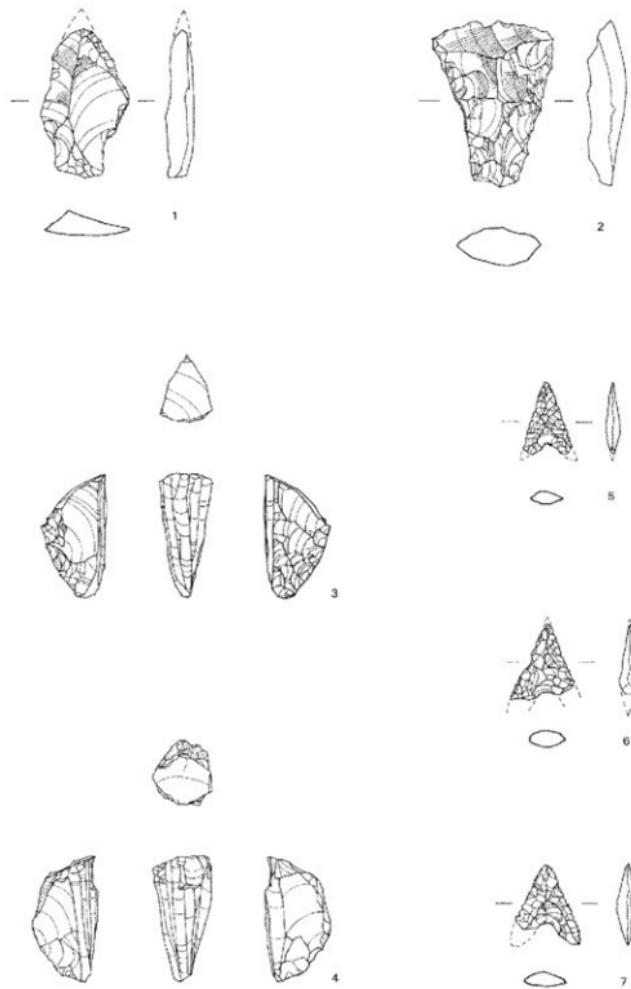
ここでは、前掲した遺構の他から出土した朝鮮半島系の土器をまとめて紹介する。

1は無文土器の牛角把手付壺の把手である。色調はにぶい黄橙色で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。B15区III層出土。2は無文土器の口縁で、粘土帯を貼りつけているものである。一部に指圧痕が残る。灰黄褐色の色調で、胎土には石英・長石・金雲母を含む。D3区IV層出土。3・4は樂浪系瓦質土器片である。3は無文の壺片と考えられ、ロクロによる回転ナデ調整されている。4は底部破片で、静止糸切り痕がみられ、わずかに残る胴部下端にはケズリを施している。いずれも褐灰色を呈する。3がD7区III層、4がD3・6区IV層出土。5～8は三韓系瓦質土器壺片である。5は網席文タタキを施した後に沈線を入れる。内面は當て具痕をナデ消す。6は格子目タタキを行う。7は格子目タタキの後に沈線を施す。8は繩席文タタキを施した後で一部に沈線を入れる。色調は5・6が灰色、7が黄灰色、8が褐灰色である。5・8がF7区V層、6がD3区IV層、7がD3・6区IV層から出土した。9～11は陶質土器である。9はハケメと沈線を施す窓部片である。器肉はにぶい橙色を呈する。10は無文の壺窓部片である。平行タタキの後ナデ仕上げしている。内面も一部ナデの痕が残る。器肉は灰赤色を呈する。11はハケメを施す破片である。器肉はにぶい橙色を呈する。9がB17区III層、10がD2・4・5区IV、11がF8区V層出土である。

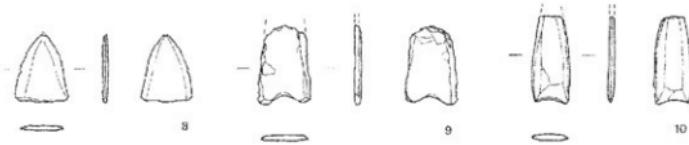
註1 柳田康縛1991「九州」『古墳時代の研究』6 雄山閣

(2) 石器・石製品 (第40図～第49図)

1は黒曜石製三棱形尖頭器である。重さ7.8g、B2区II層出土。2は黒曜石製台形様石器である。重さ17.2g、C7・8区落ち込み10出土。3・4は黒曜石製細石核である。重さは3が9.1g、4が11.6g。3はD8区V層、4はF6区土器窓I層出土。5～7は黒曜石製無茎打製石核である。重さは5が0.7g、6が1.4g、7が1.1g。5はB区I層、6はE1区III層、7はD4区IV層出土。8～10は無茎刃製石鍬である。全て頁岩製。重さは8が1.5g、9が2.8g、10が2.9g。8はF区土器窓III層、9はC3・4・5区落ち込み1、10はF区土器窓IV層出土。11～15は磨製石剣である。15は未製品。全て頁岩製。重さは11が15.0g、12が24.5g、13が50.4g、14が19.6g、15が93.1g。11はB16区1号濠I層、12はB区3号土塙、13はD10区V層、14はD9区III層、15はD5区IV層出土。16～18は磨製石戈である。16は粘板岩製、17・18は頁岩製。重さは16が27.1g、17が100.9g、18が66.2g。16はC2区III層、17はD7区IV層、18はC7区III層出土。19～21は方柱状片刃石斧である。19・20は抉入。19・21は粘板岩製、20は頁岩製。重さは19が246.6g、20が221.1g、21が67.1g。19はC区2号土塙、20がF5区IVa層、21がB2区III層出土。22～27は石盤である。22～25は粘板岩製、26・27は頁岩製。重さは22が43.6g、23が40.8g、24が12.4g、25が10.4g、26が34.6g、27が12.0g。22・27はB3区III層、23はC4区III層、24はB14区III層、25はB2区2号溝、26はB6区III層出土。28・29は石製紡錘車である。29は穿孔無く未製品。28は頁岩製、29は砂岩製。重さは28が31.6g、29が16.0g。28はE1区III層、29はB20区III層出土。30は石斧の未製品である。頁岩製、重さ390.2g。B区2号溝出土。31～44は石鎌である。31・32・33・44は未製品。44は石庖丁に転用か。全て頁岩製。重さは31が51.6g、32が104.1g、33が61.0g、34が17.1g、35が64.1g、36が24.4g、37が31.3g、38が19.9g、39が15.7g、40が16.4g、41が29.2g、42が19.5g、43が29.6g、44が23.8g。31はE区、32はD8区IV層、33はC3区III層、34はD9区IV層、35はD7区IV層、36はA2区II層、37はC区1号濠、38はD10区V層、39はD9・10区IV層、40はB区1号濠II層、41はD7区III層、42はD4区IV層、43はC5区III層、44はC7・8区落ち込み10出土。45～51は石臼である。45・46・51は未製品。46が粘板岩製、残りは頁岩製。重さは45が36.3g、46が34.3g、47が21.3g、48が47.7g、49が25.9g、50が22.4g、51が38.0g。45はC区1号濠I層、46はC区1号濠、47はC4・6区落ち込み6、48はD3・6区IV層、49はC2区落ち込み2、50はB区20号上塙、51がD7区V層出土。52～69は砥石である。66～69は破損後凹石に転用。53・55・59・60・66・68は頁岩製、他は砂岩製。重さは52が185.3g、53が113.8g、54が118.0g、55が273.4g、56が1020.5g、57が992.3g、58が854.4g、59が188.0g、60が1009.4g、61が1738.7g、62が439.4g、63が304.1g、64が436.6g、65が818.2g、66が421.8g、67が930.4g、68が646.2g、69が638.7g。52・56・57はB区2号溝、53はC2区III層、54はC区落ち込み1、55はC区落ち込み10、58はB区1号濠、59・60・68はF区土器窓IV層、61はF区土器窓V層、62・67はF区土器窓III層、63・64はD7区IV層、65はD区VI層、66はD10区III層、69はF区土器窓I層出土。70は多孔質玄武岩製の支脚形石製品である。重さ900.5g、D5区IV層出土。71は凝灰岩製の石錐未製品である。重さ2253.0g、D区集石遺構出土。



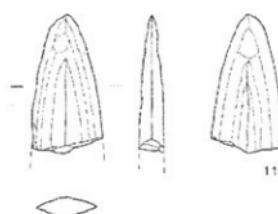
第40図 石器・石製品① (2/3)



8

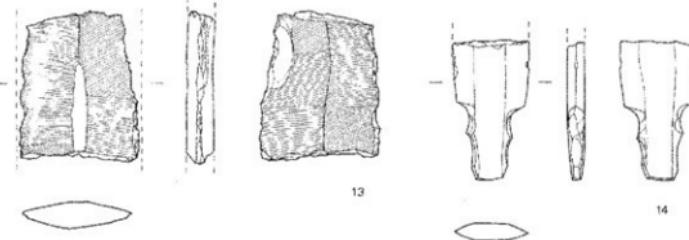
9

10



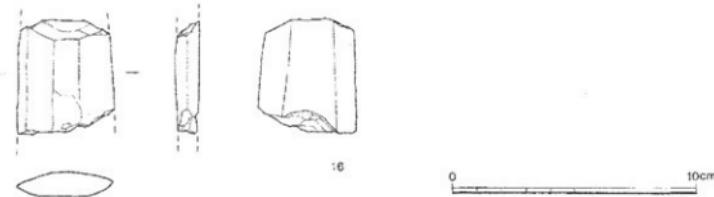
11

12



13

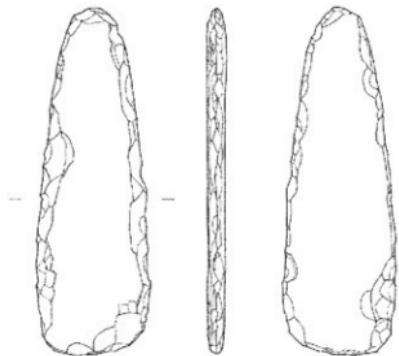
14



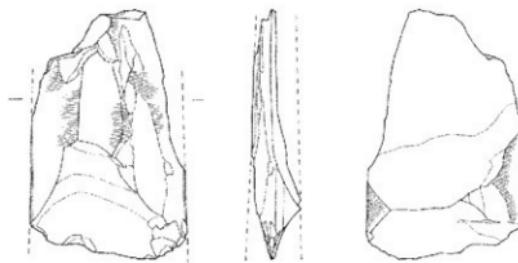
16

0 10cm

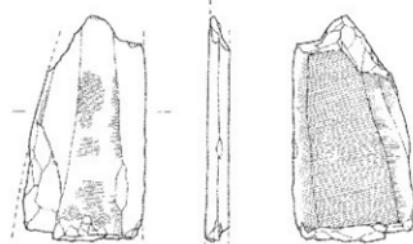
第41図 石器・石製品② (1/2)



15



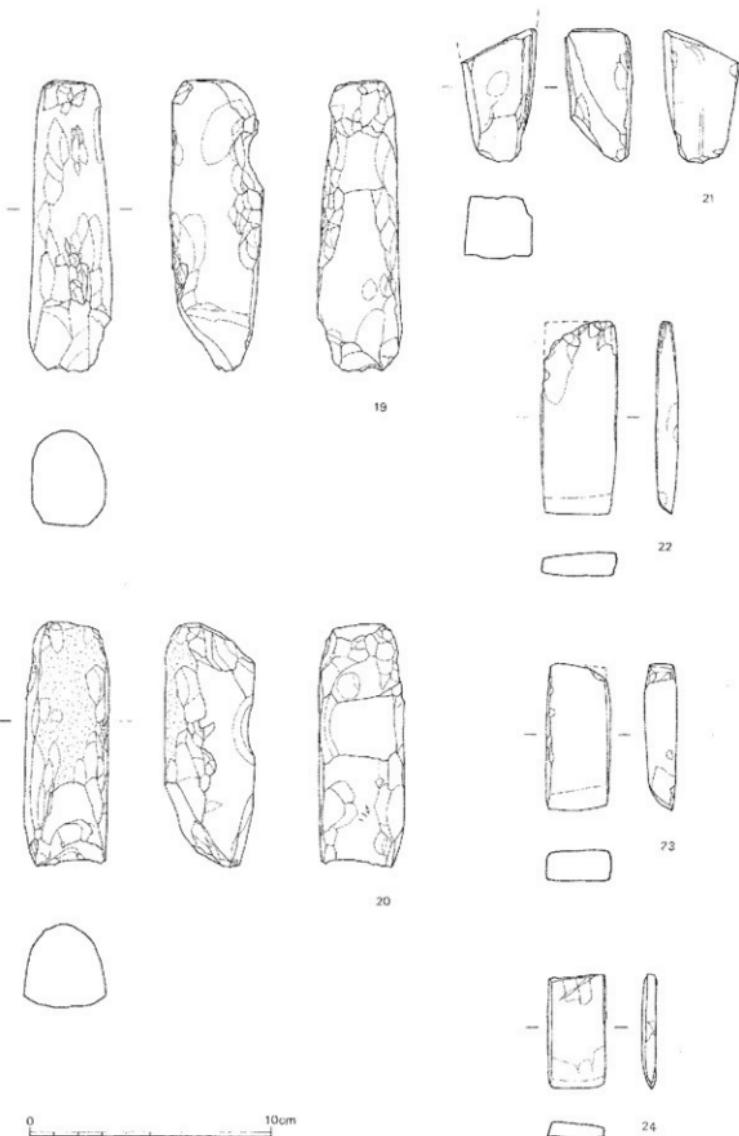
17



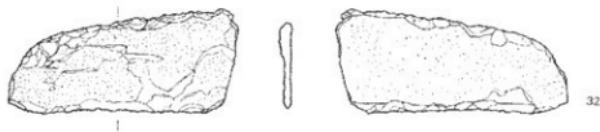
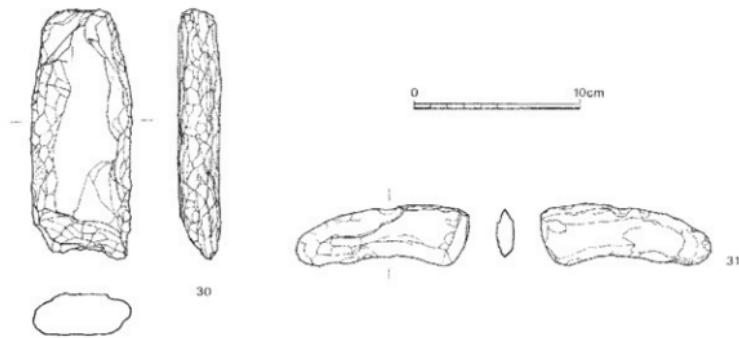
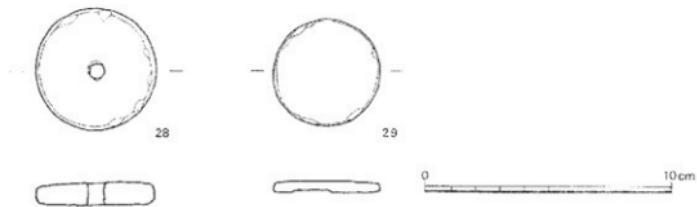
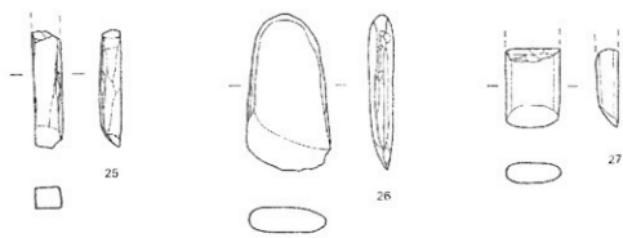
18



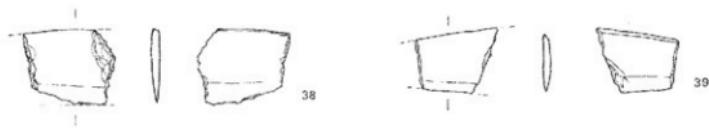
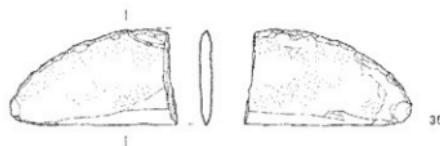
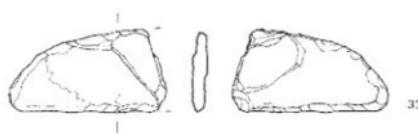
第42図 石器・石製品③ (1/2)



第43図 石器・石製品④ (1/2)

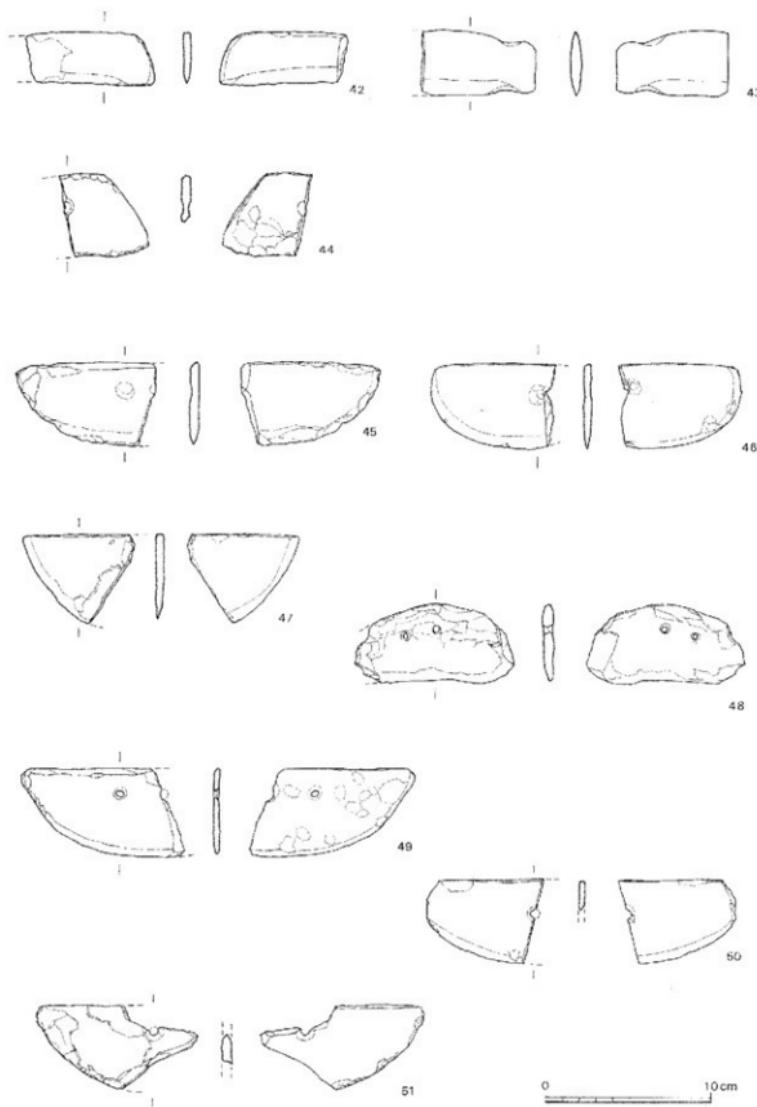


第44図 石器・石製品⑤ (1/2, 1/3)

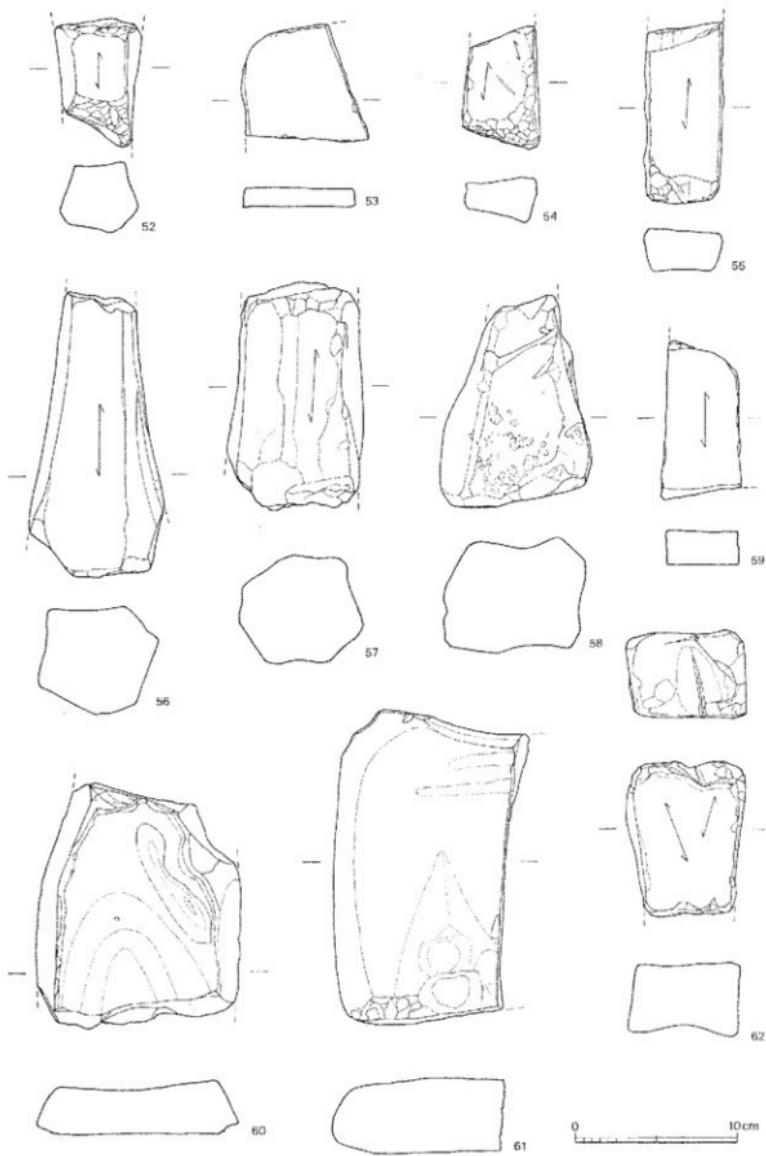


0 10cm

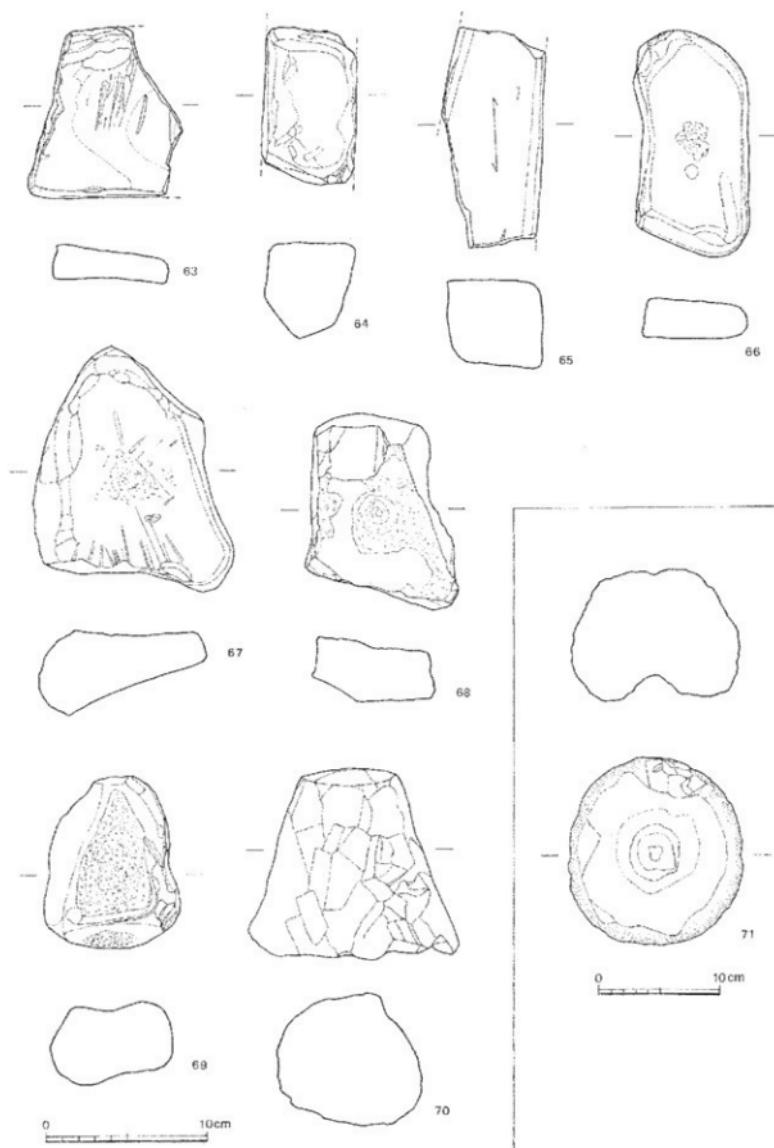
第45図 石器・石製品⑥ (1/3)



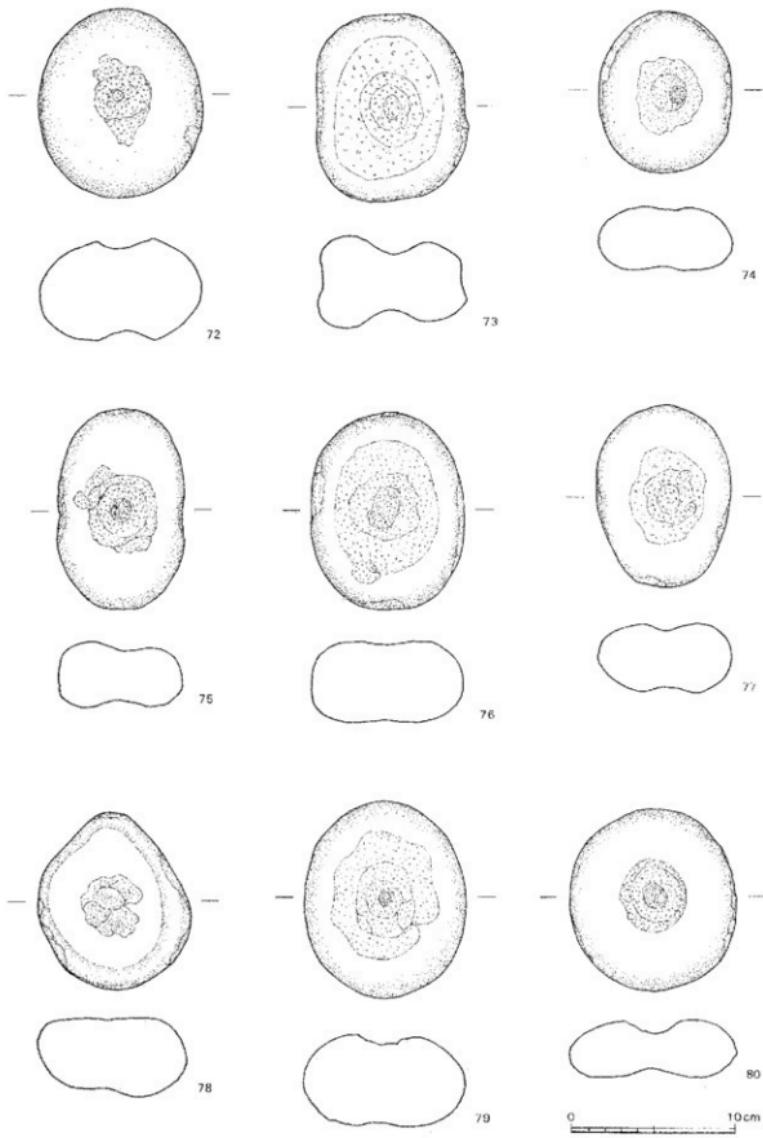
第46図 石器・石製品(2) (1/3)



第47図 石器・石製品⑧ (1/3)



第48図 石器・石製品⑨ (1/3, 1/4)



第49図 石器・石製品⑩ (1/3)

72～80は玄武岩製の円石・敲石・磨石である。重さは72が1150.8g, 73が968.2g, 74が512.2g, 75が624.1g, 76が981.4g, 77が614.5g, 78が706.8g, 79が1030.7g, 80が553.6g。72はC区落ち込み10, 73はD5区IVa層, 74は下区土器窯III層, 75はC区1号窯, 76はD10区V層, 77はA区1号窯, 78はD区VI層, 79はD10区III層, 80はB区6号土壤出土。

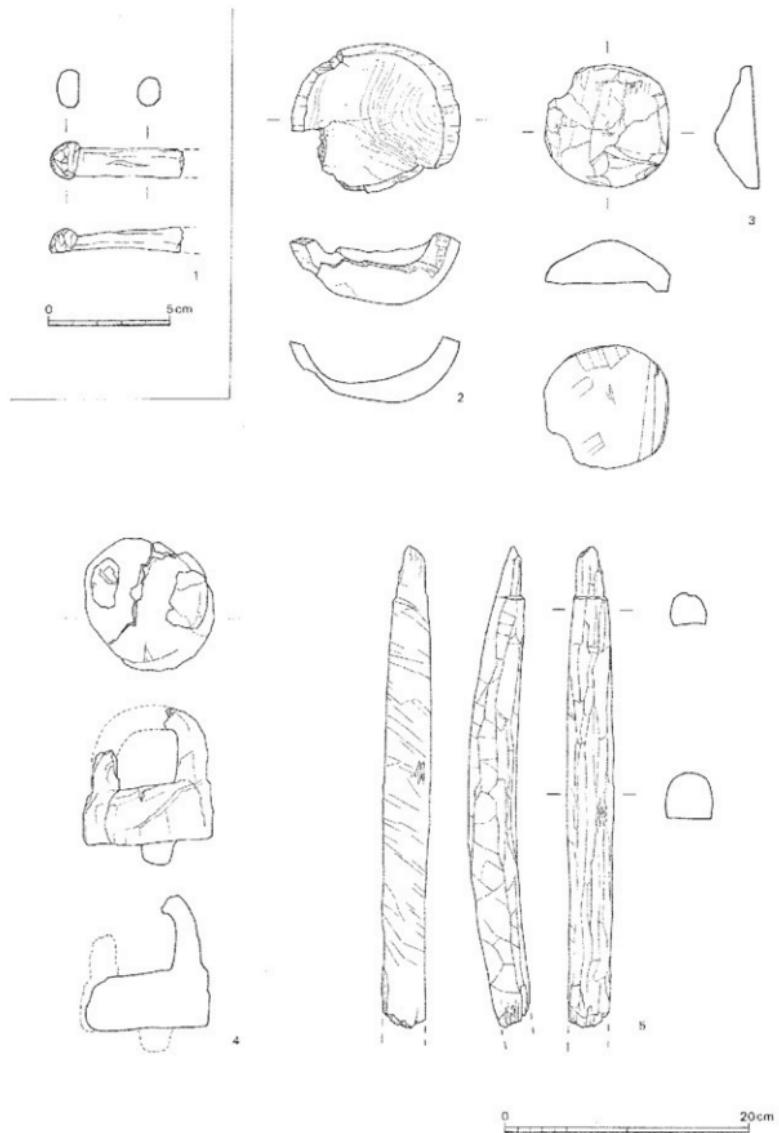
(3) 金属製品（第65図）

1は大泉五十である。青銅製で、法量は長径28.15mm, 短径27.65mm, 厚さ2.45mm, 重さ5.5gである。中央に8.60mm×8.65mmの方孔があり、上に「大」、下に「泉」、右に「五」、左に「十」の文字を鏤る。中国の王莽により紀元7年初鋳され、新（紀元8～23年）の時代に使用された。E区II層、近世～近代の水田擾乱層から出土した。以前に原の辻遺跡に入っていたものが混入したと考えられる。これまで学術的には、福岡市の鴻臚館跡で10世紀後半の土壤から出土した1例が知られていた。原の辻遺跡では、これまで前漢の五銖銭と新の貨泉（6例）が出土しており、大泉五十の出土によって中国の古代貨幣が3種類そろったことは、日本で初めての事例である。2は青銅製の銅鏡である。長さ32mm, 幅8mm, 厚さ4mm, 重さ2.2gを測る。C4区III層から出土した。

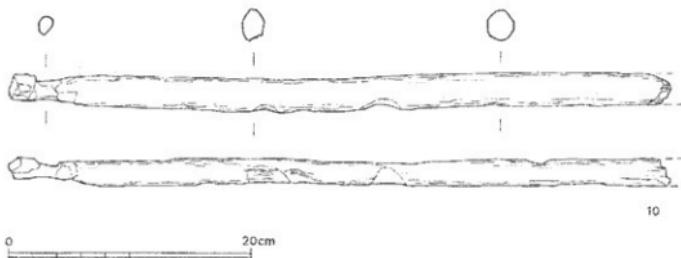
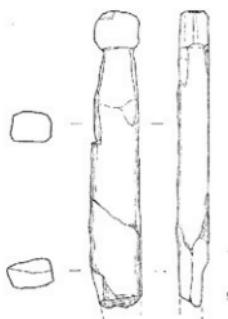
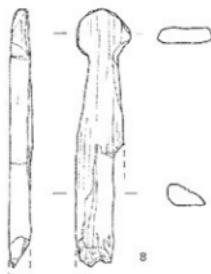
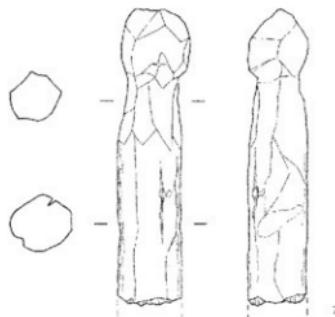
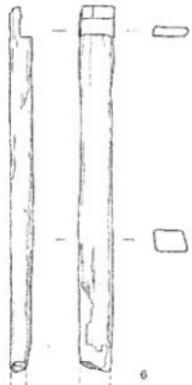
(4) 木製品（第50図～第64図）

木製品は、平成10年度から今年度まで実施した特定調査により、旧河道や濠等から各種多数の出土がみられた。ここではそれらをまとめて紹介するが、時間的な関係上杭など一部のものについては省略した。なお、過年度の遺構については原の辻遺跡調査事務所報告書第16・19集を参照頂きたい。

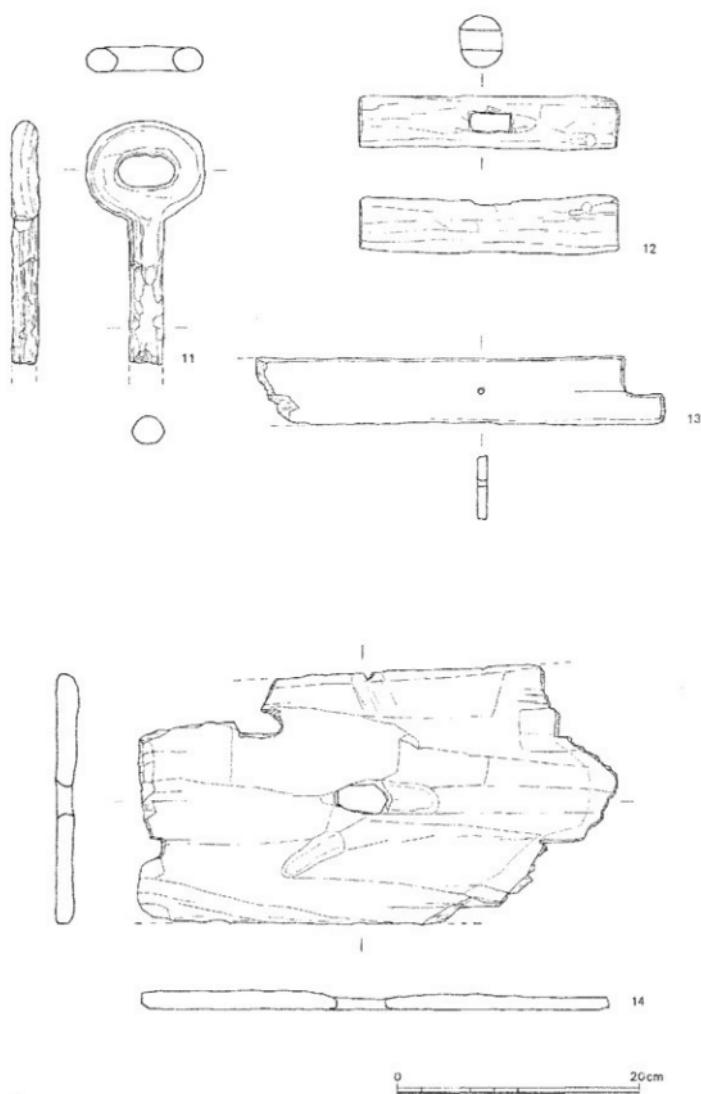
1は機織り具の経巻具である。圓物形（男根形木製品）の可能性も考えられる。現存長5.5cm, 幅1.5cm, 厚さ1cmを測る。平成11年度B区1号旧河道出土。2は柄を欠損した杓子である。最大径14cmを測る。平成11年度E区3号旧河道出土。3は何らかの未製品と思われる。最大径10cmを測る。平成11年度E区土器窯出土。4は留め具であろう。平成11年度E区2号旧河道出土。5～10は何らかの部材と思われる。5が現存長39cm, 幅4cm, 厚さ4cm, 6が現存長30cm, 幅3cm, 厚さ2cm, 7が現存長24cm, 幅5cm, 厚さ5cm, 8が現存長21cm, 幅4.5cm, 厚さ2cm, 9が現存長24cm, 幅4cm, 厚さ2.5cm, 10が現存長54cm, 幅2.5cm, 厚さ2cmである。5が平成11年度E区2号旧河道, 6・7が平成11年度B区1号旧河道, 8が平成11年度E2区II層, 9が平成11年度E16区III層, 10が平成11年度E区3号旧河道から出土した。11～14は用途不明のものである。11が現存長20cm, 環状部最大径10cm, 厚さ2cm, 12が長さ21cm, 幅4.5cm, 厚さ5cm, 13が現存長33.5cm, 幅5.5cm, 厚さ0.9cm, 14が現存長38.5cm, 幅20.5cm, 厚さ1.5cmを測る。いずれも平成11年度E区3号旧河道から出土した。15～19は櫛柄である。15が長さ101.5cm, 16が長さ113cm, 17が現存長45cm, 18が現存長41cm, 19が48.5cmである。15が平成10年度E区5号窯, 16・19が平成12年度B区1号窯, 17・18が平成11年度E区3号旧河道から出土した。20は又歯の一部である。平成11年度E区2号旧河道から出土した。21・22は櫛柄と考えられるが、21は柄部先にも柄が折れたような痕跡があり、別の可能性もある。21が現存長26.5



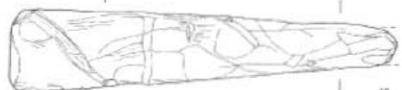
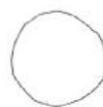
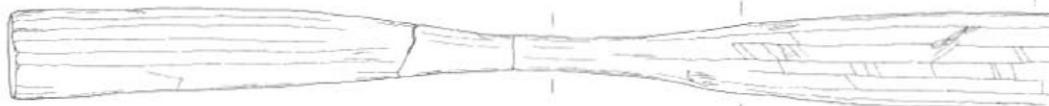
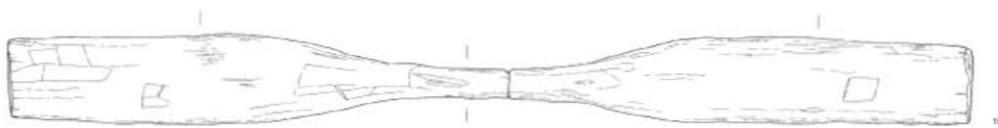
第50図 木製品① (1/2, 1/4)



第51図 木製品② (1/4)



第52図 木製品③ (1/4)

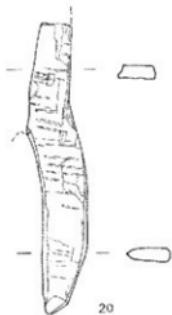


0 20cm

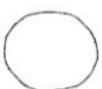
第53図 木製品① (1/4)



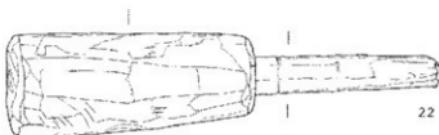
19



20



21

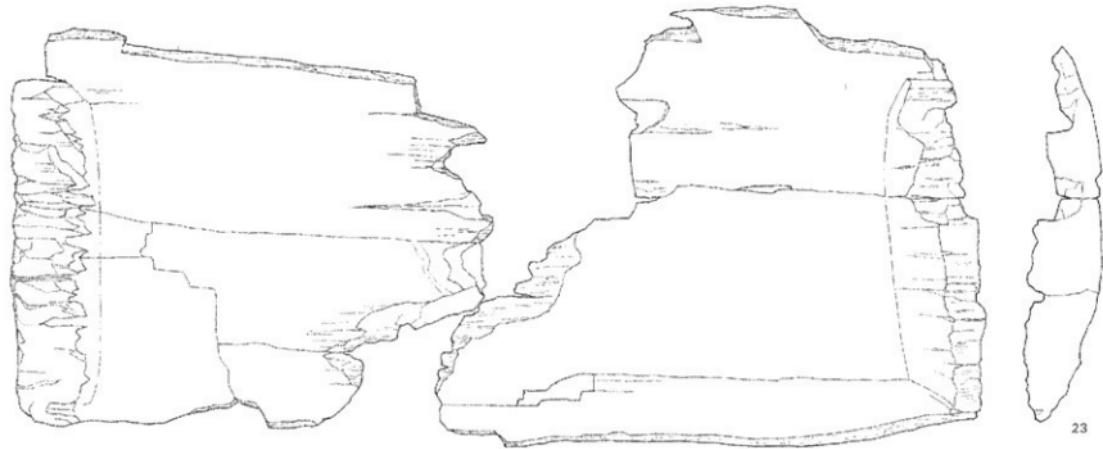


22



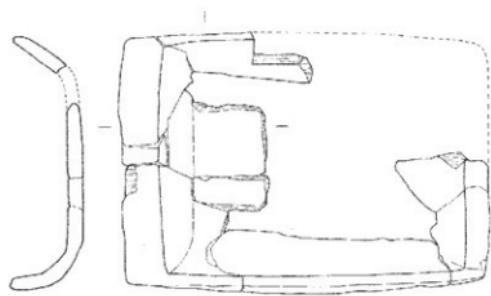
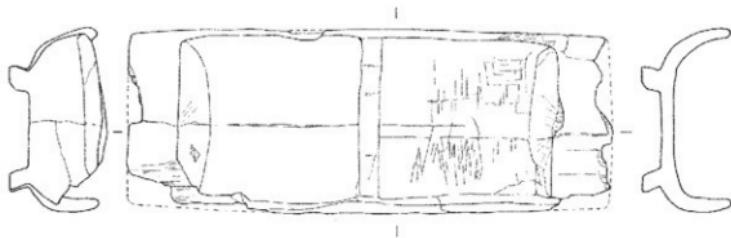
0 20cm

第54図 木製品(5) (1/4)



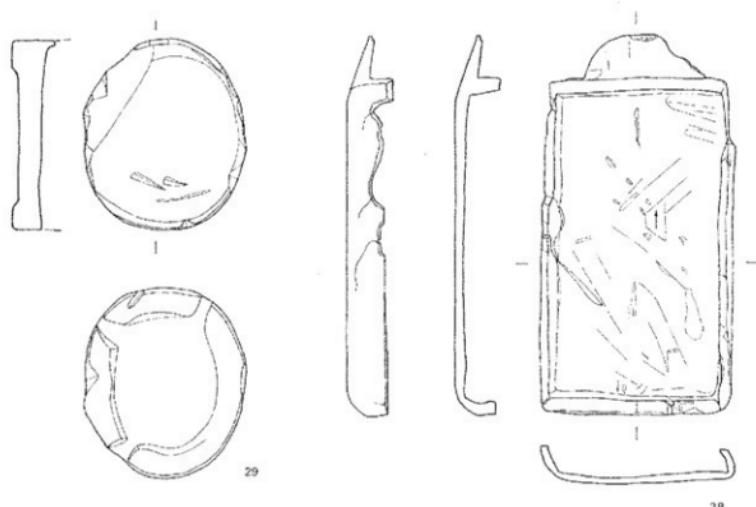
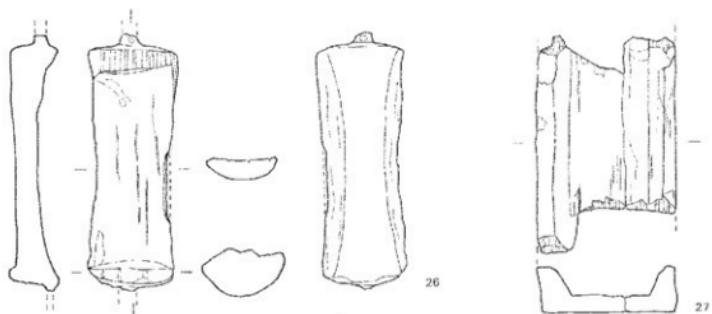
0 20cm

第55図 木製品⑥ (1/4)



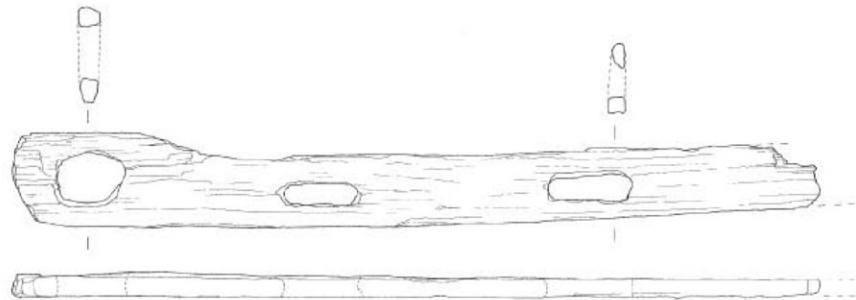
0 20cm

第56図 木製品⑦ (1/4)

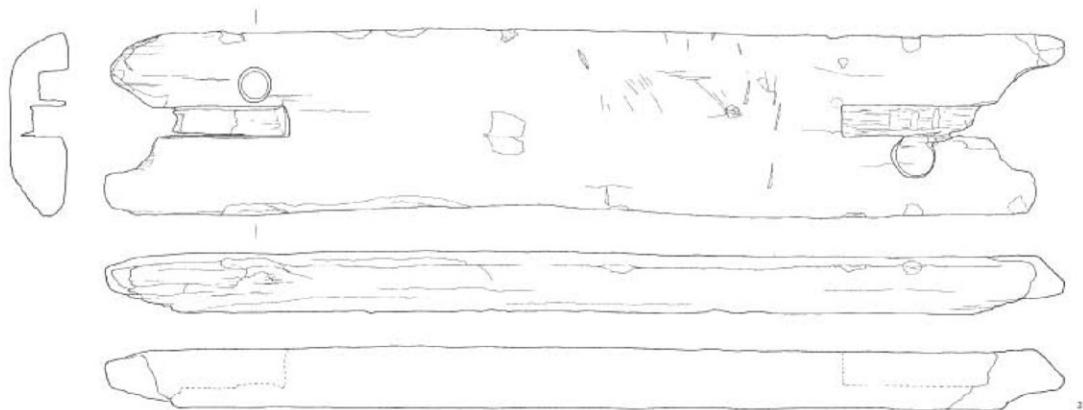


0 20cm

第57図 木製品⑧ (1/4)



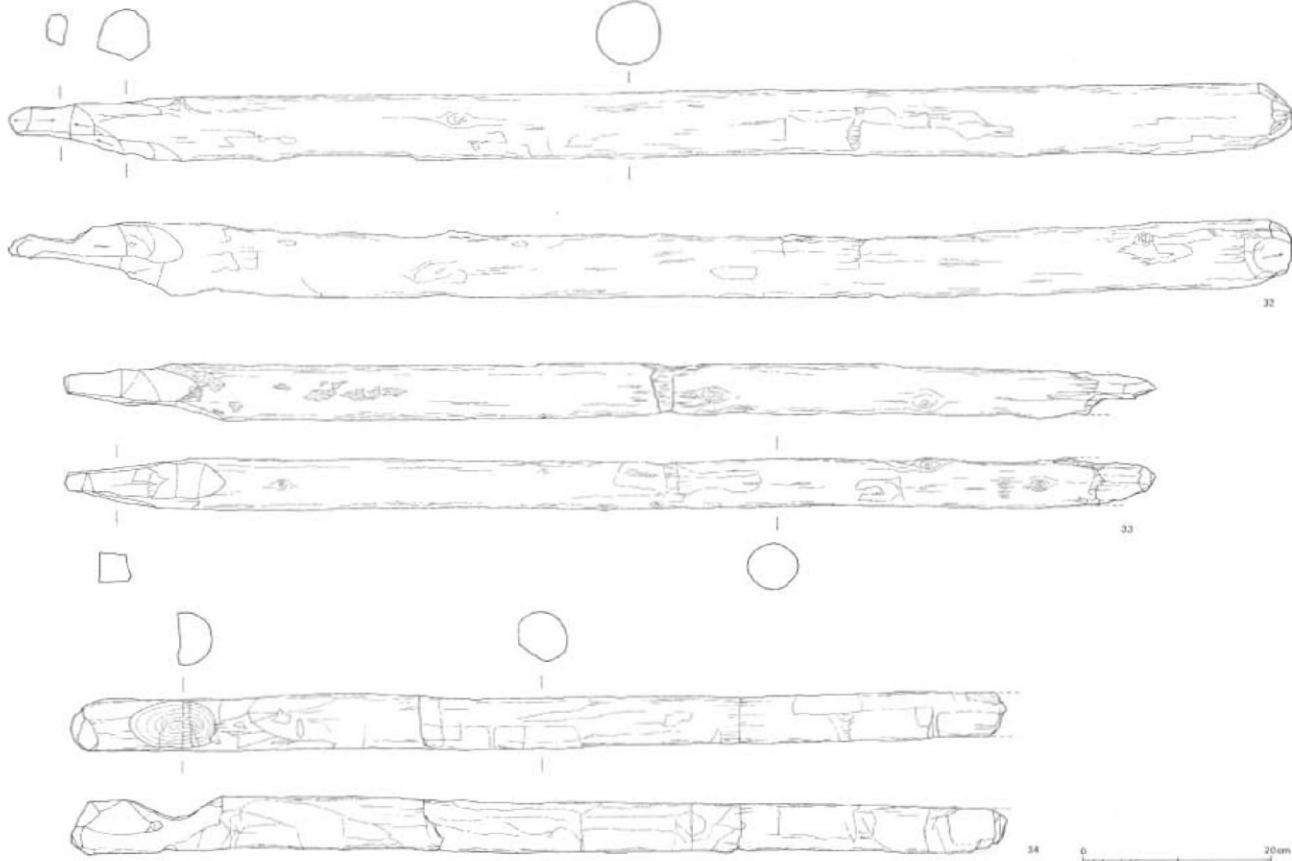
20



21



第58図 木製品⑤ (1/4)



第59回 木製品③ (1/4)

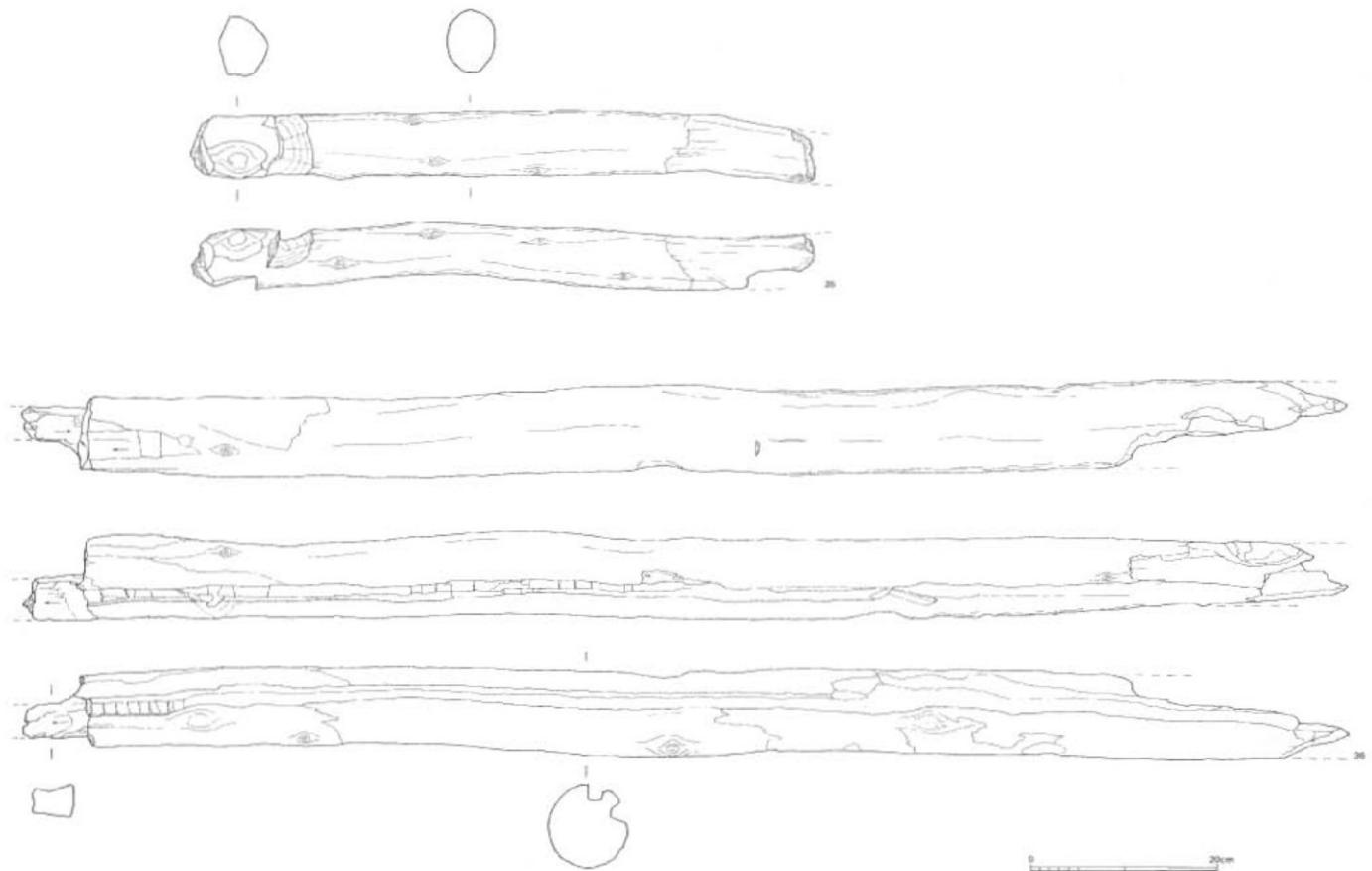
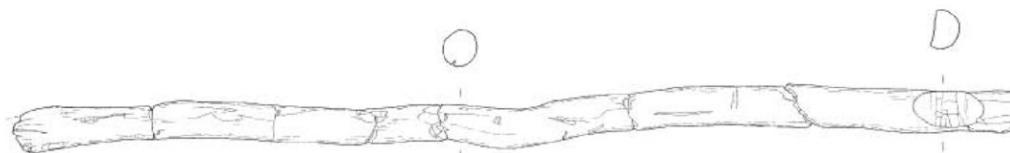
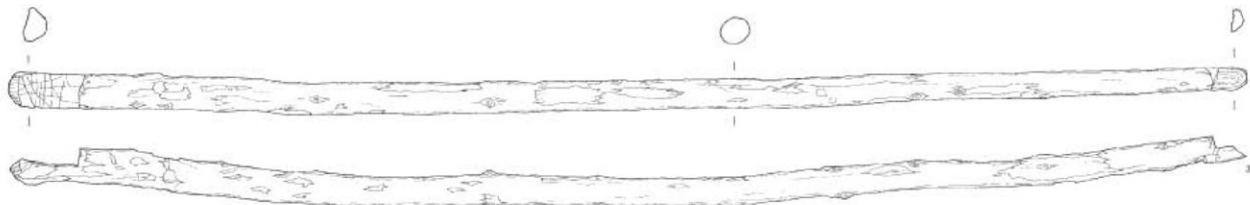
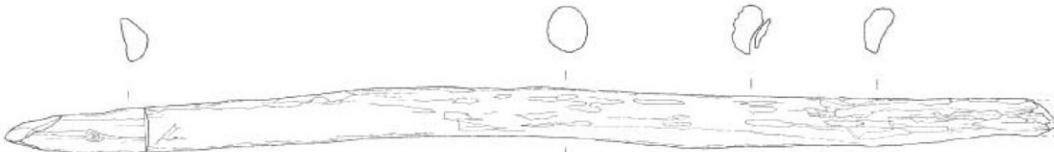
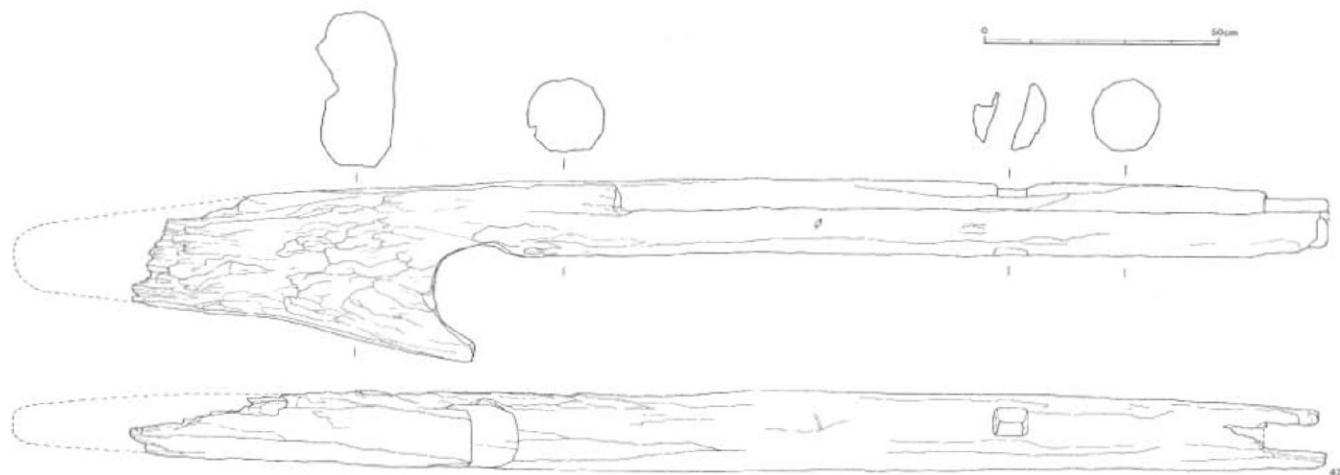
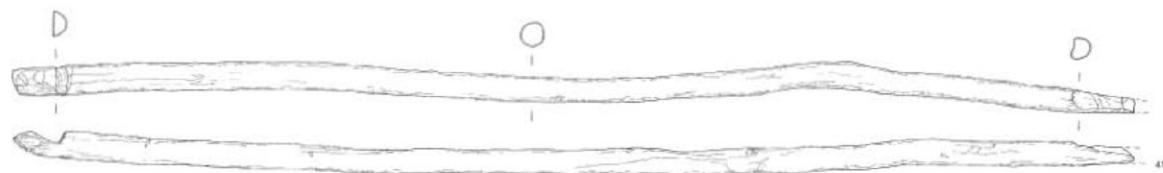
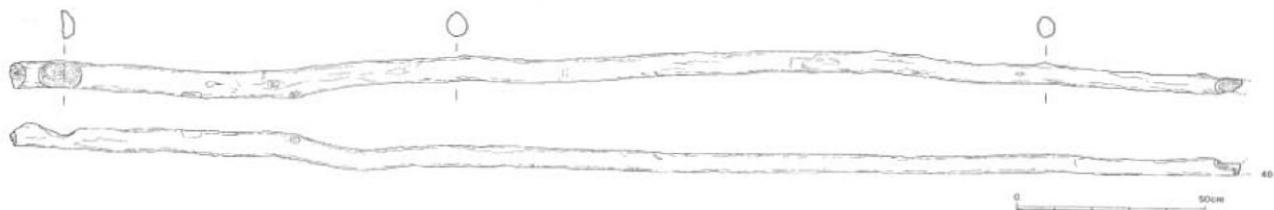


図60 四 木製品1b (1/4)



0 30cm

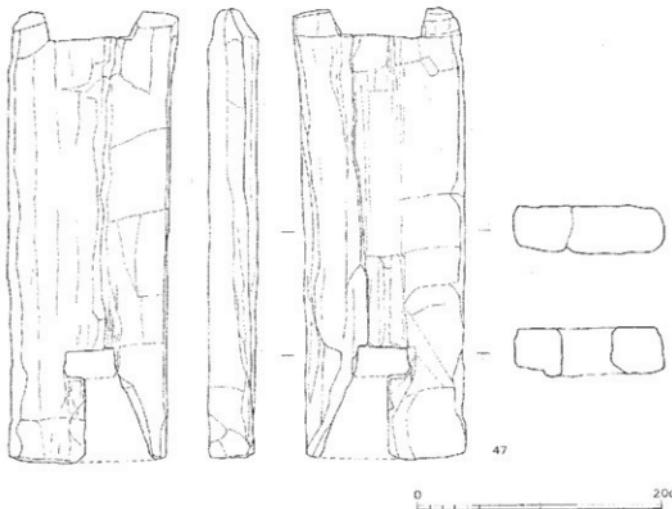
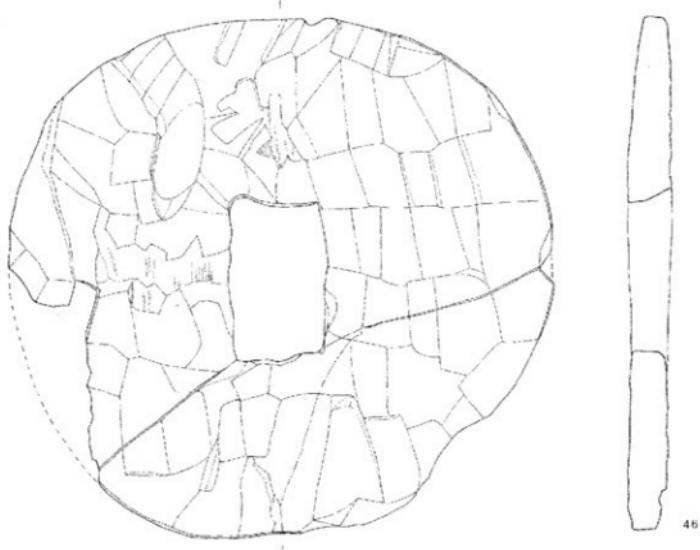
第61回 木製品② (1/6)



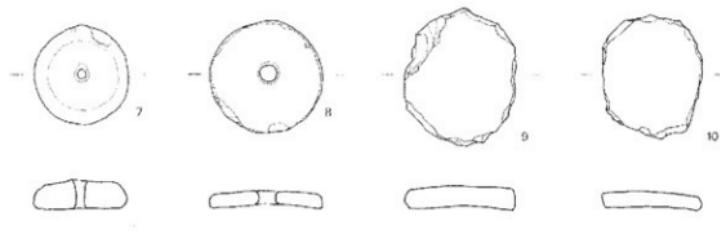
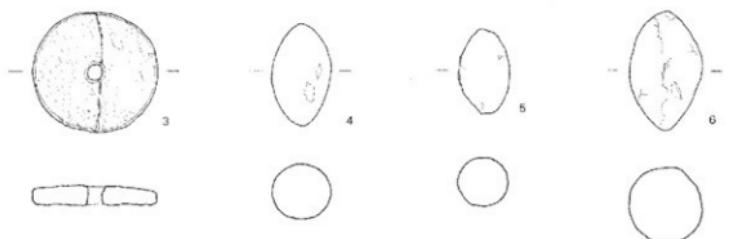
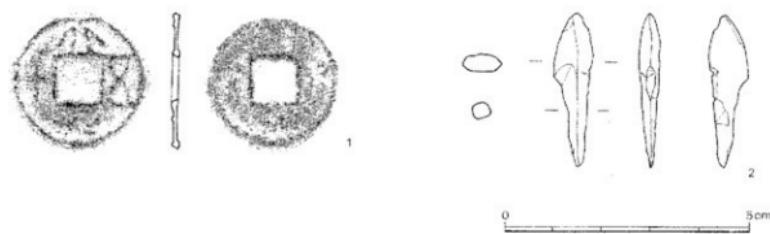
第62圖 木製品⑬ (1/8, 1/10)



第5図 A区・B区造構配図 (1/100)



第64図 木製品⑯ (1/4)



0 10cm



第65図 金属製品・骨角器・土製品・装飾品 (1/1, 1/2)

cm, 22が長さ36cmを測る。ともに平成11年度E区3号旧河道から出土した。23~29は槽及び何らかの器の一部と考えられるものである。24は長さ40cm, 幅15cm, 高さ8cm, 28が長さ31cm, 幅16cm, 高さ4cmである。23が平成11年度E区3号旧河道, 24が平成10年度B区2号濠, 25~29が平成11年度E区3号旧河道から出土した。30~43は建築部材と考えられる。42は船材の可能性もある。30は現存長86cm, 幅10cm, 厚さ2.5cm, 31は長さ101.5cm, 幅19.5cm, 厚さ6.5cm, 32は長さ135.5cm, 33が現存長115.5cm, 34が現存長91cm, 35が現存長67cm, 36が現存長141cm, 37が169cm, 38が長さ198cm, 39が現存長161cm, 40が現存長329cm, 41が現存長235cm, 42が現存長253cm, 43が現存長98cmである。30・31・34・37・38・40・41・42が平成11年度E区3号旧河道, 32が平成11年度E区3号溝, 33・36が平成11年度B区1号旧河道, 35・39が平成11年度E区2号旧河道, 43が平成10年度B区2号濠から出土した。44は長さ60.5cm, 幅11.5cmが残存した梯子である。平成11年度E区3号旧河道から出土した。45は蔀戸の留め具と考えられる。長さ14.8cm, 幅6.5cm, 厚さ2.8cmを測る。平成11年度B区1号旧河道から出土した。46はネズミ返しである。長径44.5cm, 短径42.5cm, 中央に12.5cm×7.5cmの方孔をもつ。平成11年度B区1号旧河道から出土した。47は用途不明のものである。長さ37cm, 幅13cm, 厚さ4cmを測る。平成11年度E区3号旧河道から出土した。

(5) 骨角器 (第65図)

3は鯨骨製の紡錘車である。長径4.6cm, 短径4.5cm, 厚さ0.8cm, 重さ13.6gである。C7・8区落ち込み10から出土した。

(6) 土製品 (第65図)

4~6は紡錘形の土製投弾である。4が長さ4.2cm, 幅2.4cm, 重さ21.6g, 5が長さ3.5cm, 幅2.1cm, 重さ12.2g, 6が長さ4.9cm, 幅3.0cm, 重さ37.3gを測る。4がB区4号土壠, 5がE区V層, 6がF3区IVd層から出土した。7・8は土製紡錘車である。8は土器片を転用したものである。7が長径4.1cm, 短径3.9cm, 厚さ1.2cm, 重さ20.5gである。8が長径4.7cm, 短径4.6cm, 厚さ0.6cm, 重さ13.3gである。7はE8区IVb層, 8がD5区III層から出土した。9・10は土器片の周りを丸く面取りした円盤状土製品である。重さが9は26.7g, 10が16.5gを測る。9がD3区IV層, 10がD9区V層から出土した。

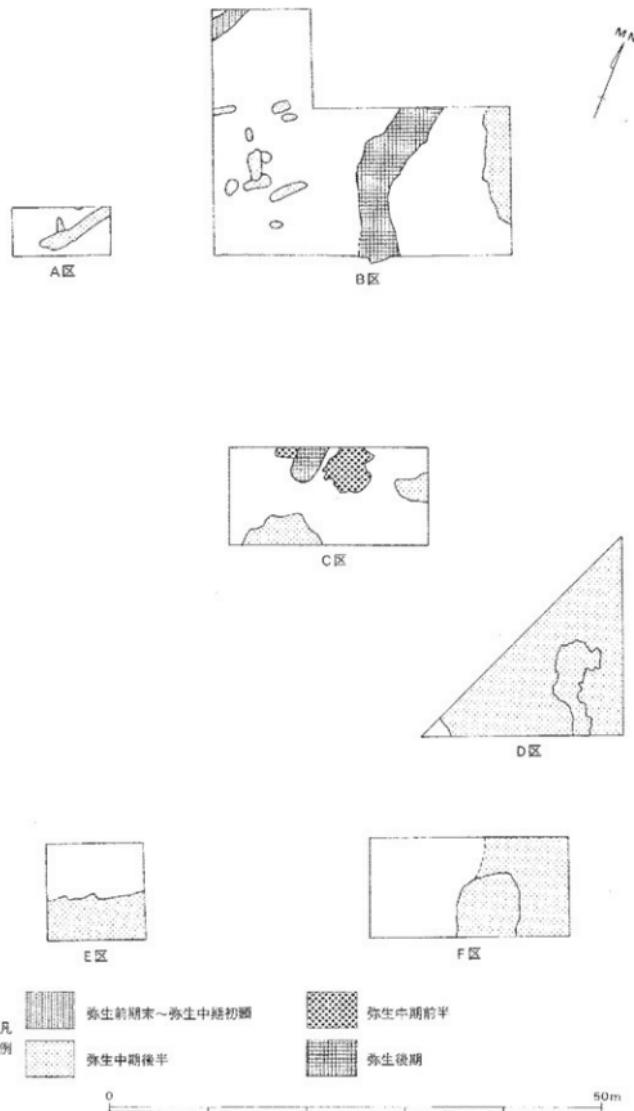
(7) 装飾品 (第65図)

11は淡緑色の碧玉製管玉である。長さ4mm, 径2mmで, F6区IVa層から出土した。12・13は藍色のガラス玉である。12が長さ4mm, 径6mmで, B16区1号濠1層から出土した。13は長さ2.5mm, 径3mmで, F5区土器溜VI層から出土した。

4. まとめ（第4図・第66図）

最後に平成12年度環濠等状況調査の成果について簡単にまとめてみたい。遺構では、旧河道2条、濠1条、溝2条、土壙数10基、土器窓1、集石造構等を確認した。以下、検出した遺構の内容をもとに、過去の調査結果を踏まえて、今回の調査地区の状況の時期的変遷を考察する。

原の辻遺跡では、弥生前期末に居住が始まったことがこれまでの調査で明らかになっているが、今回の調査地区のB区においても改めて検証された。弥生前期末～弥生中期初頭の遺物を伴う2号溝の確認がそれである。A区・B区・C区はいずれも同じ微高地内にあったと考えられる。北は幡ヶ谷川本流にあたる旧河道、東は1号旧河道、南は2号旧河道、西は平成10年度船着き場付近水路等状況調査での1号旧河道と、周りをすべて旧河道に囲まれた微高地である。これまでの調査で、地山の削平状況等からこの微高地は北西から南東に向かって傾斜していた可能性が高いと考えられる。2号溝は、平成10年度特定調査や今年度の原の辻遺跡発掘調査事業の調査で、北西方向と南東方向に伸びることがわかっている。さらにこの溝の北には5mほど離れて同じ時期の溝がもう1条沿うように走っていることも確認された。これらの溝の走る方向は微高地の傾斜を横切っており、地形との関係を考えられる。この微高地内では、弥生前期末の遺物を伴う遺構がこれら2条の溝以外に確認されていないが、恐らくは溝の北側、微高地内ではより高く旧河道との比高が高い場所の南側斜面から、弥生前期末以降居住が始まったと推測される。溝の南東側であるA区・B区で確認した土壙は、時期が確認できたもののはほとんどが弥生中期後半のものであった。時間的経過とともに居住域が拡大したことを示すものであろう。さらに南に移ると、土壙や柱穴状小穴は漸次減少傾向がみられ、平成11年度の特定調査B区ではまだ確認できたが、今年度のC区ではほとんど確認されなかった。この調査区付近が居住域の南限と考えられる。また、河道を挟んで隣接する北西側の微高地には、同じ時期に朝鮮半島系の人々の集住域と考えられる場所があり、南西には河港を挟んで弥生中期の船着き場があるため、この微高地では、渡來した人々との民間レベルでの交渉・交易が行われた可能性も考えられる。前漢時代の五銖錢と三翼鐵、朝鮮系無文土器、楽浪系土器等の大陵や朝鮮半島からもたらされた遺物が数多く出土しているからである。船着き場に面する南西地区は未調査であるので、今後の調査が期待される。微高地の南東端に位置する土器窓は、弥生中期前葉～弥生後期後半の資料を出土していること、二次的に形成されたものであることを確認した。平成11年度特定調査による出土品から、付近に祭祀的施設の存在が推測されたが、地山が後世の削平をうけており確認できなかった。弥生後期に入ると微高地内における居住域は放棄され、今回確認した1号濠も含めて5条に及ぶ濠が設けられたと考えられる。過去から今回の調査に至るまで、これらの濠以外に弥生後期の遺物を出土した遺構は、この微高地内では確認されていない。平成11年度特定調査で確認した弥生後期における多重環濠の掘り直しとともに、「倭國大乱」関連の軍事的緊張状況を反映したものであろう。この弥生後期の変容は、多重環濠の掘削と船着き場の築造によって一支国王都としての整備が行われた弥生中期前半とともに、原の辻遺跡における二大歴期といえよう。



第66図 時期別造構配置図 (1/500)

図 版



A区全景（左侧南端50m）

図版 2



B区全景

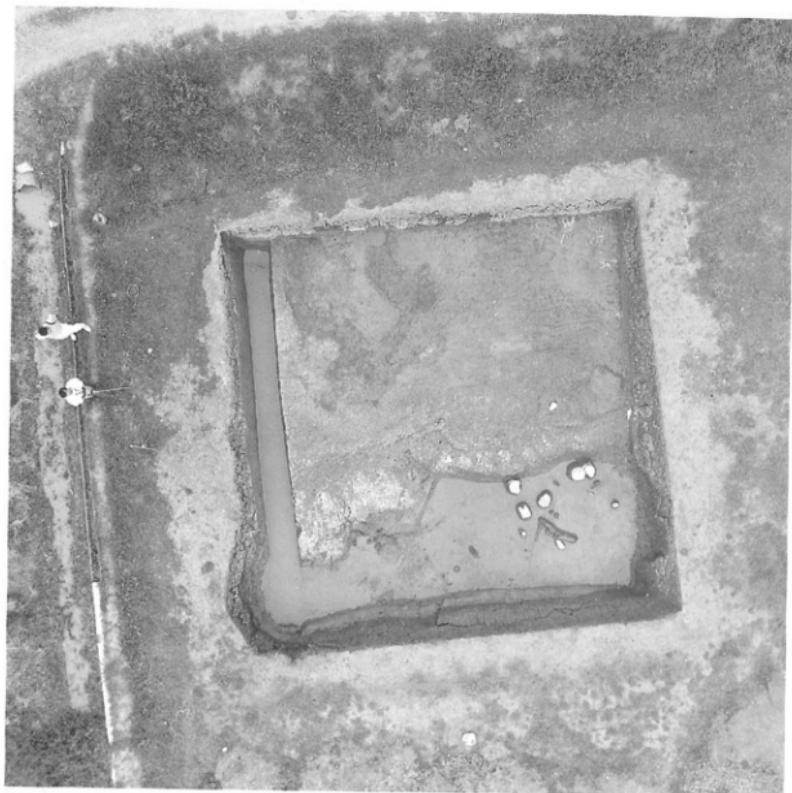


C区全景

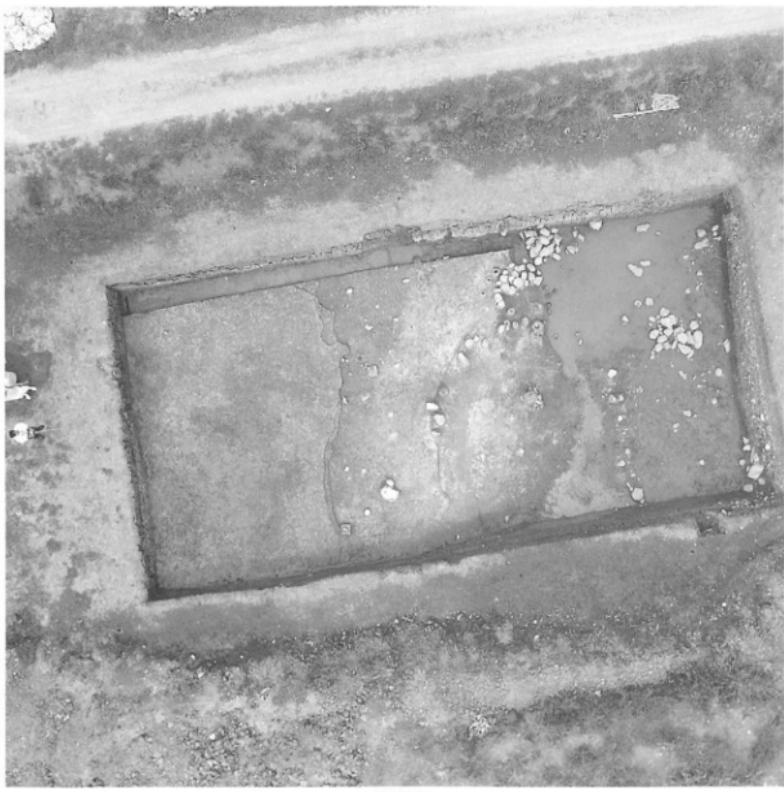
図版 4



D区全景



E区全景



F 区全景



調査区遠景



B 区調査風景



F 区調査風景

図版 8



B区北部（南から）



B区東部（西から）



B区南部（西から）



C区西部（東から）



C区東部（東から）



D区全景（東から）

図版10





B区
1号濠全景（東から）



B区
1号濠全景（南から）



B区
1号濠断面土層

図版12



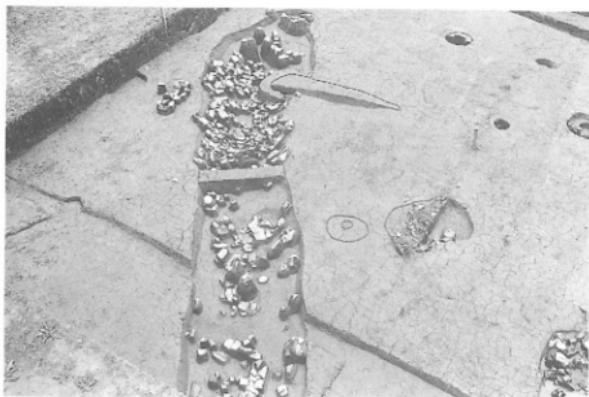
B区1号濠
遺物出土状況



C区
1号濠全景（北から）



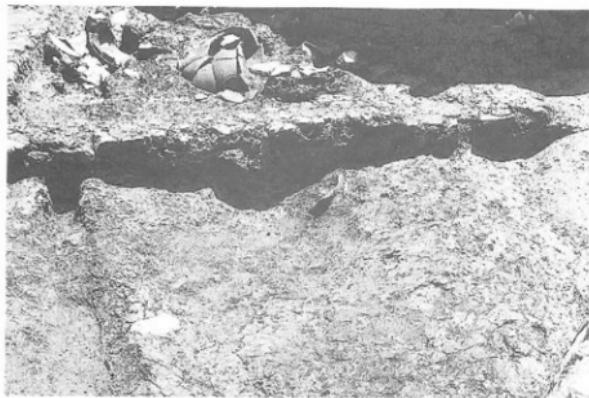
C区1号濠
遺物出土状況



A区
1号溝全景（東から）



A区1号溝
遺物出土状況



B区2号溝
遺物出土状況

図版14



B区3号土壤
遺物出土状況



B区5号土壤
遺物出土状況



F区
土器溜全景（東から）



F区
土器窯全景（北から）

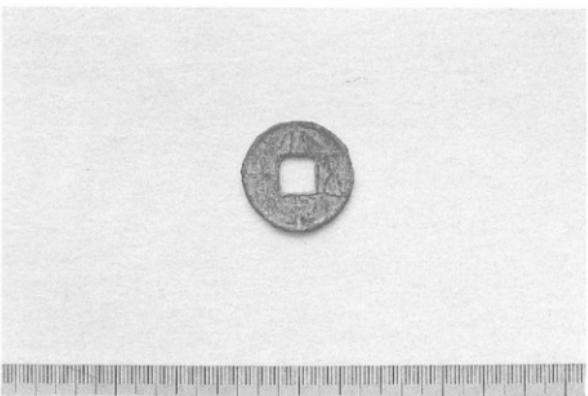


D区
集石遺構全景（東から）



D区集石遺構
遺物出土状況

図版16



報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書						
卷次	III						
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書						
シリーズ番号	第21集						
編著者名	杉原敦史・藤村誠						
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所						
所在地	811-5322 長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1 TEL09204(5)4080						
発行年月日	西暦2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐郡 芦辺町深江 鶴亀触	42423	33°45'34"	129°45'6"	20000518 20001020	1,300m ²	特定調査
取録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡	集落・包含地	弥生時代 古墳時代	旧河道2条 濠1条 溝2条 土壙 土器窯 集石造構	弥生土器 朝鮮系無文土器 奈浪系瓦質土器 三韓系瓦質土器 陶質土器 土師器 須恵器 打製・磨製石器 木製品 人骨五十 銅鏡 管玉 ガラス玉			

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集

原の辻遺跡

2001. 3. 31

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂印刷